ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第47号

埋経と石造文化----------難波田　徹-----1

中海道遺跡の再検討(3) ----------中川　和哉----12

－平成4年度発掘調査略報－----------18

12. 芋谷遺跡　　15. 鹿谷遺跡

13. 奈具岡遺跡　　16. 平安京右京七条三坊二町

14. 下岡古墳　　17. 内里八丁遺跡

資料紹介　遠所遺跡出土木簡----------土橋　誠-----28

研究ノート　3重の列石がめぐる後期古墳2例----------小池　寛-----33

研修だより　中国研修に参加して
－文化財保護研究者訪中団、訪中報告－ ----------小池　寛-----35

府内遺跡紹介　58. 史跡平川廃寺跡----------40

長岡京跡調査だより・44----------44

センターの動向----------47

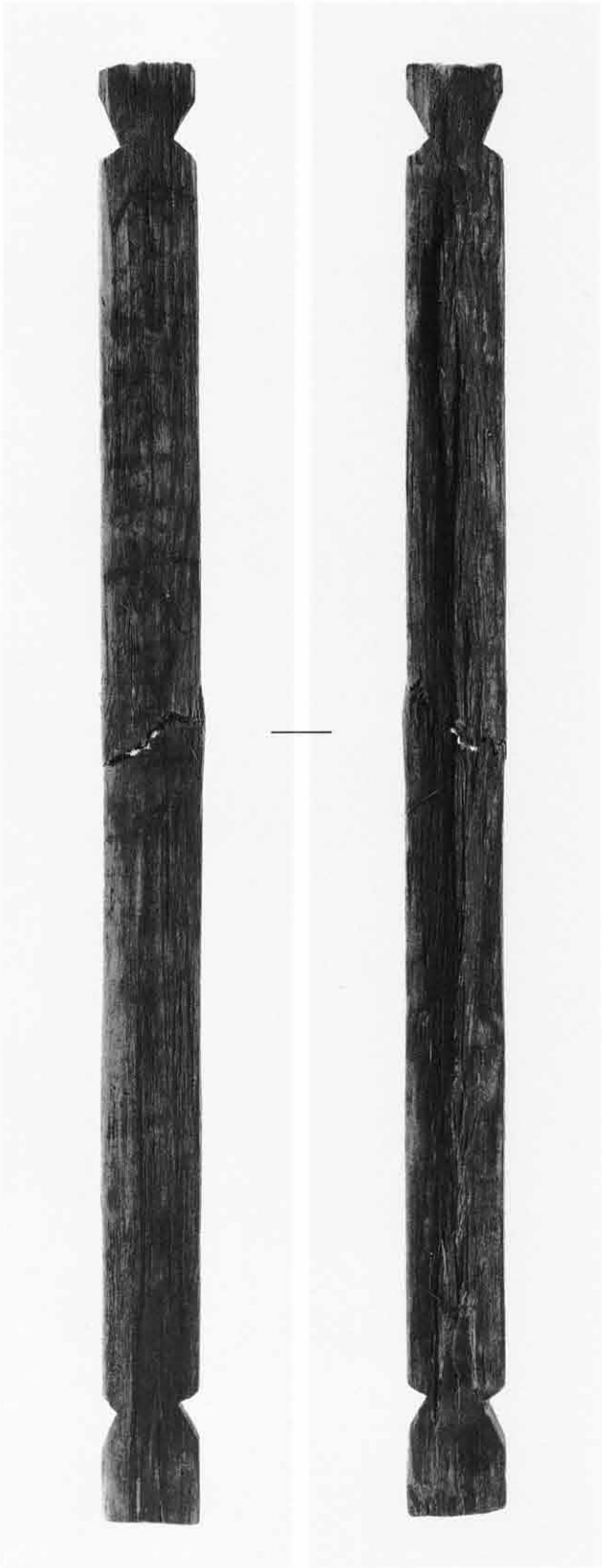
受贈図書一覧----------49

1993年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版　遠所遺跡出土木簡

（表）「〈余部郷□真成田租籾五斗〈」



（裏）（文字なし）

埋経と石造文化

難波田　徹

はじめに

「いつ」「だれが」「どこへ」「なにを」「なんのために」というのを追究するのが、埋経研究の課題だといえようが、「いつ」というのは土の中に埋経された年月日、「だれが」はその願主とか結縁者が誰であったかということ、「どこへ」は埋経の場所、そして、「なにを」は経典の種類を指しているのであるが、埋経についてはその多くが紙本経であったため経典の種類の確認がむつかしい。伝世写経はともかく埋経の場合には埋経された経典が何であったのかということが重要な課題となってくる。この五つの課題のうち、「どこへ」は土の中から出てきた時、結果的にはそのことを知ることができるのであるが、それ以外は経容器の刻銘などによって、さらに経巻の奥書などがあれば、これらによってその実態を知ることができる。しかし、これまでは結果以前には「どこへ」ということはその多くが偶然の発見ということもあって確たることが明らかでないことが多かった。今でも古墳の発掘調査が進むにつれて埋経の施設が確認されたりすることが多く、最初[注1]から埋経の施設だということで発掘されることは宗教聖地だということもあるのだろうが、その直接の発掘は比較的少ないように思われる。

ここでは、この「どこへ」ということに主眼をおき従来の研究を踏まえて検討することにした。「どこへ」ということからすれば、本来は地上の標識のようなものがあっただろうと思われるのであるが、今はそれもなく発掘の成果に負うところが多いのである。地上の標識の問題は石造文化の研究の対象ともなるといえよう[注2]。

1

埋経の施設がどこにあったのかということは古絵図などの資料によって知ることができるのであるが、なかなかこの古絵図と出土の遺物が一致することは少ない。これら古絵図からはすべてとはいわないが埋経の施設のある場合、その場所というか位置を知ることは可能であるが、この記載などから発掘調査が行われたということはほとんどなかった[注3]。この「どこへ」ということを三宅敏之氏はかつて五分類されたことがあった[注4]。その第一は寺

院や神社の境内あるいはその近傍、その第二は第一と関連して人びとが聖なるところと考えた霊地、その第三は第一と関連をもつことの多い墳墓の近辺、その第四は第一と第二とも関連する場合があるが周辺より一段高い見晴しのよい丘陵地、その第五はどうして選ばれたのか特に指摘しえない所、の五つに分類されたのである。確かに古絵図の多くは社寺の境内をえがいたものが多く伝えられていることとも関係してこようが、古絵図による埋経の施設の存在はこの第一が多く認められる。

ここでは、その一つの具体例をあげてみよう。それは京都市上京区にある北野天満宮のそれである(注5)。これは、まさに第一の神社の境内での築造であった。これも偶然の機会での発見であり、現在の本殿西側にある御羽車舎のすぐ西側で避雷針のパンザマストの敷設工事に伴い掘られた穴からの発見であった。その穴は地表下約１ｍぐらいだったといい、そこからコブシ大の礫とともに壺が確認されたという。この規模と壺などからみて、平安時代末期から鎌倉時代にかけての通例の埋経の施設ということになるのであるが、この報告でみる限り特別の施設があったとは考えられないし、地上の標識らしきものも確認されていない。

ともかくここから陶製甕と銅製経筒、その経筒のなかから紙本経残塊がでてきたのである。その肝心の紙本経は腐蝕が甚しく、それを復原することさえできない状態であった。しかし、その紙本経が腐蝕しているとはいえその形状からして十巻あったということは確認された。この十巻という数字は残塊状になっているので確たる根拠はないのであるが、巻数からして法華経とその開結経の十巻だったと思われる。軸木そのものは素朴なものではあったがよく残っていると思われた。

その紙本経を納置した銅製経筒は、総高26.3cm、胴径12.0cm、底径13.7cmと、経筒としてはすこし大振りの部類に属しているといえよう。形状は、宝珠鈕付有蓋の円筒形、底は台底系といわれるもので蓋をふくめてかなりの損傷、亀裂などが認められた。陶製甕はこの経筒の外容器であり、総高33.0cm、胴(最大径)31.0cm、底径12.4cmで、口縁部が欠失している。仕上げは巻き上げ式で造られ、二箇所に大きな継ぎ目が認められる。篦削りによる成形が顕著であるが、その器表には灰釉がかかっている。焼成そのものは堅質で全体に暗赤褐色を呈しているが、こうした器形、器表の特徴は知多半島の常滑窯の製品と考えられ、平安時代末期から鎌倉時代にかけての年代観をもっていた。常滑窯の製品が外容器に用いられることはあったが、ここでは外容器ということとともに常滑窯の製品の地方伝播を知ることにもなったわけである。顕著な例としてはそれまで京都市左京区の花背別所の埋経に際して常滑窯の製品が用いられたことが知られていたが、これは12世紀中葉の年代観をもつ常滑窯の製品の基準作としての評価をうけていたものであった。

これらが出土した遺物の概要ということになるのであるが、見た眼にはここにこうした埋経の施設があったということは確認できない状態だった。それは明治期における神仏分離、廃仏棄釈という文化大革命のなか神社から仏教的な施設が取り除かれた際、こうした埋経の施設(埋経する場合、マウンド状の塚を築き、地上の標識をたてるのが通例のようであった)も同様であり、整地されたと考えられるのである。ともかく偶然の機会の発見だったわけであるが、神社の境内に築かれたという一例が加えられることになった。その上、このことをフォローしてくれる資料がないわけではなかった。

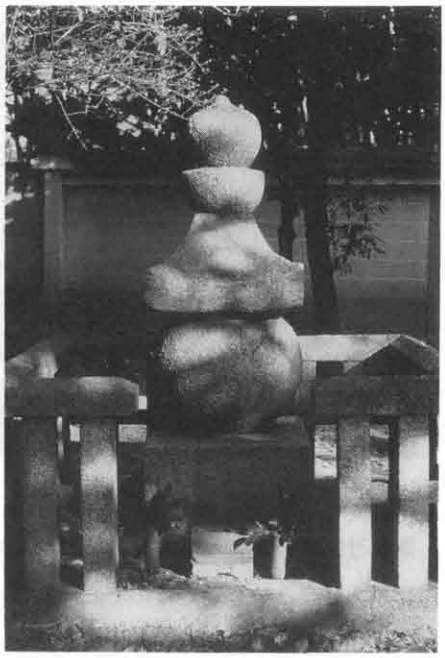


図1－1

それは、『山州名跡志』巻第八の「北野天満宮」の項に、

経塚　在_経蔵西傍_　収_大乗経_

とあり、経蔵の西に埋経の施設のあったことを誌している。社頭景観は時代とともに変化しているようであるが、たとえば絵馬堂などは、『都名所図会』巻六などをみていると現在地よりももう少し東北の方に位置していたようであり、その境内について、室町時代末期に制作された北野参詣曼荼羅図についてみると、楼門を入ってすぐ左側には花経蔵と輪蔵がえがかれ、制作が元和末寛永初とされる野外遊楽図には絵馬堂と経蔵の間に宝篋印塔と経蔵の西に鳥居を伴った五輪塔がえがかれており、こうした絵画表現もこの埋経の施設を表していたのであろうか。

図1－2

2

ここで取り上げる京都市東山区にある祇園社(八坂神社)の境内からは埋経に関する出土の遺物について今のところ全く確認されていない。しかし、祇園社絵図(重要文化財)がの

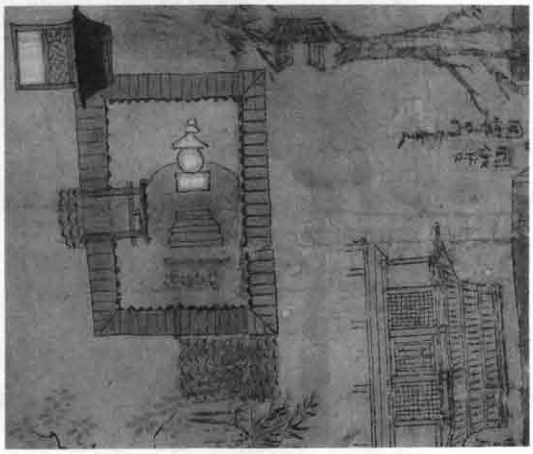


図2

こされており、埋経の施設のことを知ることができる。この古絵図は今では「元徳古図」と通称されているが、この祇園社は貞観年間の創立から現在の建物ができあがるまでに顚倒、触穢、焼亡などによって幾度となく神殿の改築が行われてきたようであるが、この古絵図は神殿触穢によって遷座が行われた際に制作されたものである。そうすると、この古絵図にえがかれた実景描写はこの時期の社頭景観の実況描写ということになるのであるが、元徳以前に神殿などが焼亡したのは承久2年ということなのでこの時期にまで遡りうると考えられる。この神殿に加えてそれ以後に聖域に加えられたものが加えられて社頭景観がまとめられたのであろうが、その神殿のすぐ右、鳥居を伴い瑞垣をめぐらして、その内側にマウンド状の頂に石造の五輪塔がえがかれている。その形状からして鎌倉時代と思われるが、このところに「如法経塔」という墨書が確認される。これはいわゆる如法経を納めた塔すなわち塚だったということを意味しているのであるが、これを詳細にみてみると、鳥居の位置が南から西に移動しており、そのことはいずれも緑青によって塗りつぶされていることがわかる。聖域での加筆訂正という具体例ともいえるが、このあたりは豊臣秀吉の時代に大きく変貌している。この埋経の施設のあたりに多宝大塔がたてられたのであり、その実態が不明のまま如法経塔は姿を消していったのである。厖大な数の資料が八坂神社にはのこされているが、今のところこの埋経の施設についての記載は確認されていない。こうしたことは何も祇園社に限ってのことではないが、この古絵図からは如法経塚が祇園社の境内にあったということはまちがいないところである。これも神社の境内の一例ということができよう。

3

京都府相楽郡山城町大字神童子にある神童寺もその一つであるが、ここにも古絵図が伝えられており、その原本は室町時代ということであるが、今には江戸時代に再画されたものがのこされている。この古絵図でみると、神童寺の中世はかなりの規模の寺だったということがわかるのであるが、ここに注目すべき三つの記載がある。石造の宝塔、宝篋印塔とともに、「如法塔」「法華塚」「心経塚」という墨書が加えられており、如法如説の写

経、法華経の写経、般若心経の写経と、それぞれがどのような埋経であったのかということを厳密に区別して表現されているのである。(注6) そのことは、これら埋経の施設が神童寺にとっては重要な施設だったということをも意味しているのであろうが、ここ神童寺は埋経の原点ともいうべき奈良県吉野郡金峯山に対して北の吉野山といわれたところであり、平安貴族などが盛んに埋経に訪れたということが考えられるのである。ここからも今のところ出土した遺物のことは確認されておらず、ただ埋経の施設があったということを古絵図を通して知るのみである。しかしながらこれだけでも寺院の境内のどの位置に築かれたのかということがわかるだけでも重要な資料だということができよう。

図3－1

図3－2

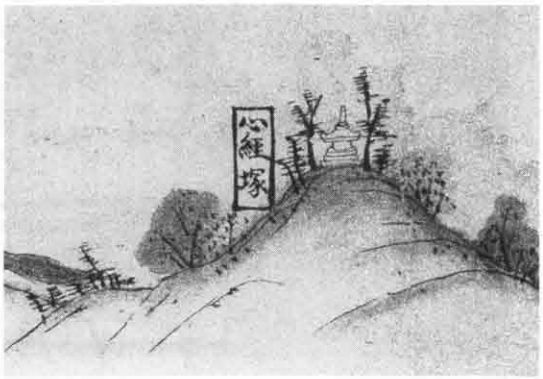


図3－3

埋経の施設としてみた場合、社寺の境内の池の中島などに築かれていたことが古絵図などでわかるが、こうした古絵図はないが実際に発掘調査が行われて埋経の実態が確認されたところもある。京都市右京区の弥勒半跏思惟像で有名な広隆寺の池の中島から埋経の遺物が発掘された。奈良時代前期の押出仏をはじめとして平安(一部には鎌倉時代もふくまれるが)時代のものということになるのであるが、ここでは埋経としての標識らしきものはなかったようであるが、埋経の施設が池の中島に築かれ、そこから遺物の出土をみたという具体例を提供してくれたわけである。これまでにも記録によって京

都市東山区の六波羅蜜寺のこれも池の中島に築かれていたことが知られていた例もあるわけであるが、こうしたことを推測することのできる古絵図がある。

それは、京都市北区の賀茂別雷神社(上賀茂神社)絵図である[注7]。室町時代の社頭景観をえがいたこの古絵図にはかつてあった神宮寺の南方に池がえがかれており、残念なことにこの池の右一紙分が欠けているので池の全貌ははっきりしないが、えがかれた池の中島に石造の擬宝珠形の塔が認められる。擬宝珠形の塔が平安時代の埋経の施設の地上の標識として用いられていたことはこれまでにも確認されているが、この古絵図の擬宝珠形の塔を地上の標識とみたいのである。ここはすでに開発がすすみ、その実態は不明となり、出土の遺物のあったという報告もない。しかし、古絵図は室町時代の社頭景観ということであるが、この擬宝珠形はもう少し年代のあがるものであり、その形状からして平安時代後期と考えられるものである。それぞれの社頭には墨書銘などがあるが、ここ中島に関しては何も表現されていない。ここでも、絵画表現からのみとはいわないが、これが埋経の施設と

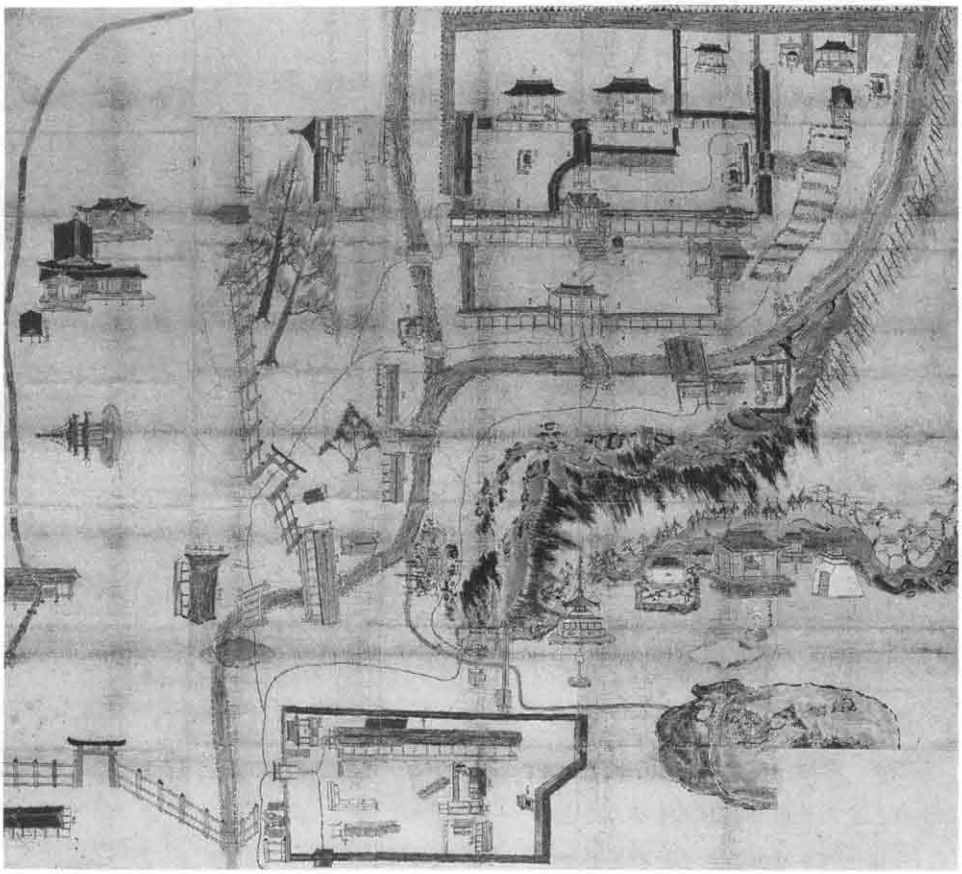


図4

大きく変わっているということは記録しておく必要があろう。

確かにこれまでの発掘調査の結果だけをみていれば墳墓の付近に埋経の施設が多いということなのであるが、やはり埋経の性格上、社寺の境内に築かれたのが多かったように思われる。なぜ、こうした埋経がおこなわれたのかということを考える時、本義は弥勒の出世を待つということであったかも知れないが、時代とともにその本義も多少なりとも変化していったようである。しかし、ここで考えられることはこの本義および変化した目的に加えて、そのはじめより社寺地であればその四至を明確にするということがあったわけで、四至の安鎮を願って埋経したということを考えてもよかったわけである。しかし、この観点にたつ立証はほとんどなかったようであり、これからはこの観点からの追究が必要となってくるであろう。私たちは『山州名跡志』の平安遷都のことに触れた記載、それは平安京の東西南北の地に大乗妙典を納めてその四至の安鎮を願ったということを無視しがちであったが、これを重要視するならば社寺の境内での埋経はその思想の延長線上にあったということができるであろう。埋経という言葉から経典をという意識が強かったわけであるが、経典は勿論のこと、彫像(これが経容器といわれるものに納置される)だったかもしれないのである。具体例としては鞍馬山でありそのことが『山州名跡志』に誌されているが、もう一つは大阪府箕面市の勝尾寺の発掘調査で確認された四天王像の彫像だったということができよう。しかし、あくまでも埋経は経巻を埋めるための行為だったわけである。

4

このようにみてくると、関連する資料、ここでは古絵図ということになるわけであるが、この古絵図と埋経の出土の遺物とが結びつくのは比較的というかあまりなく、この小文でも両者が結びつくのは北野天満宮ぐらいであり、埋経の施設が社寺の境内にあるということが確認できる程度であった。しかし、これまでは古絵図の資料を援用することすらなく、その意味ではこの古絵図のもっている資料価値は高いといえるのである。

私たちはこれまで地上の標識として次のようなことを確認していた。その一は、かの御堂関白藤原道長の金峯山埋経の際の経容器に、

件経等宝前立金銅燈籠其下埋供常燈也

とあり、ここでは金銅燈籠がその標識だったということ、その二は、藤原兼実の日記『玉葉』の、埋経の後、

其上立石造五輪塔　法性寺座主被書梵字也

と、ここでは石造の五輪塔がその標識だったということが明らかにされていた。寛弘4(1007)年、養和2(1182)年といういずれも平安時代の年号をもっていること、及びその形

状などからして、時代判定としては、平安は宝塔、鎌倉は五輪塔、室町は宝篋印塔という塔の形式によって埋経の施設の時代が考えられてきたのである。このことの多くは出土の遺物の発見をみていないので古絵図からは塔の絵画表現からしてのみの判定ということになるのであるが、神童寺の例にみるようにこうした時代の表現が画面のなかでも意識してえがかれていることを思えば、古絵図の資料の精査は埋経の施設の地上の標識の研究をフォローしてくれることであろう。

5

平安人は埋経のために名山霊寺を求めた。当時の名山霊寺については、『後拾遺往生伝』巻下の「藤原為隆卿」の項に、鞍馬、粉河、法輪、江文、信貴、高野、勧修寺がそうであったと誌されている。このうち埋経の施設として確認されたのは、鞍馬、粉河と高野ということになるのであるが、ここでは次に同じ願主であった鞍馬と粉河の埋経を考えてみたい。発見の時代は異なるのであるが、いずれも偶然の発見であり、学術的な発掘調査ということではないが、記録がそのことを証明してくれることになった。(注8)

同じ願主というのは明経道助教の清原真人信俊のことであった。その信俊が生前に数人の僧侶に如法経30余部、法華経1500部を写経させて所々の名山霊寺に送ったと、『本朝新修往生伝』には伝えている。ここにいう所々の名山霊寺が為隆卿の項にあった鞍馬以下のことを指していたと思われるが、信俊に関していえば高野は今のところ除外ということになるであろうし、今でも鞍馬、粉河以外にもこうした信俊の埋経の施設が埋まっているということは当然あるといえよう。鞍馬山のには保安元(1120)年の、粉河寺のには天治二(1125)年の、それぞれ年記の銘が経容器にはあり、12世紀初期の埋経の基準作というか、埋経の高まりがピークになるころの注目すべき遺物だということができるのである。信俊は久安元(1145)年12月２日に69歳で亡くなっていると誌している『往生伝』の書かれた時期が信俊歿後10年ということを思えばかなり信憑性のある記載ということでもあり、信俊40歳ごろの写経だったといえるのである。

保安元年、信俊は亡き父母の追善供養のために法華経１部10巻(開結経共)、弥勒上生・下生・成仏経の計13巻を鞍馬寺大徳であった重怡ら４人の僧侶に如法写経させ、天治２年には弥勒菩薩に値遇せんことを期して法華経８巻を融通念仏で知られる良忍ら７人の僧侶に写経させて粉河寺に奉納したのである。この両写経に１人の僧侶が参画しているが、こうした写経の実態は『往生伝』の記載を裏付けている。

ここでは、「どこへ」ということが主題なのであるが、鞍馬山の方は明治初年から数度にわたって発見された。こうしたこともあって、現在の本堂の下に築かれたということは

わかっているが、埋経の施設がどのようであったかは不明のようである。一方の粉河寺の方も昭和34年に粉河寺の境内にある産土神社の背後の風猛山南斜面の山地でこれも偶然の機会に発見されたといわれている。いずれにしても鞍馬、粉河とも寺院の境内地からの発見であったことはまちがいない。鞍馬山のには平安時代後期というか写経の行われたのとほぼ同じ時期の石造の宝塔が地上の標識としてたてられていたようであり、この石造の宝塔は平安時代の石造の宝塔の基準作例ともなっているのである。この埋経については江戸時代からすでに注目されていたようであり、

図5

『山州名跡志』巻之六の「鞍馬寺」の項に、東西南北の峯と中央に如法経塚があったことが誌されており、この中央とあるのが清原らを中心として行われた如法経塚とみることができるのである。粉河の方にはこうした地上の標識は確認されていないようであるが、願主の系譜そして埋経の目的のわかるこの経塚は注目される作善業だったといえるであろう。

この二つの埋経によって清原信俊の埋経の夢が明らかとなった。こうしたことを確認できることは土の中の文化にとっては重要なことであり、ほかの名山霊寺からの信俊の埋経の発見が期待されるところである。なお、鞍馬山の方には保安元年の遺物のみではなく、鎌倉、室町の年号のあるものも発見されており、埋経を考える上での一指針ということになるかも知れないが、このこともまた重要である。それはただ鞍馬山の埋経が信俊にはじまり終わったのではなく、そののちの鞍馬山を象徴づけたわけである。それは、この鞍馬山を写経の山として位置づけたのであり、その文化が今日にまで伝えられてきたということなのである。

おわりに

「いつ」「だれが」「どこへ」「なにを」「なんのために」という埋経研究の課題は、平安時代に全国的規模で行われたにもかかわらず、人々の努力によってその一つ一つが解明されつつある。しかし、「だれが」「なんのために」ということに焦点をあてるとすれば、経容器の刻銘や経巻の奥書などが確認されなければその実態にせまることはむつかし

い。その実態もただ「だれが」ということがわかったとしても、その人物がどのような立場の人でという記録上での検討が必要となってくるのである。願主、結縁者、制作者など一つの例えば経容器の制作のことを考えてもまだまだ未解決の部分が多すぎるといえるであろう。埋経の文化を考える時には、一番に重要なことはその人物の系譜が重要なのであり、なぜ埋経したのかということはこのあたりから確かなものとなってくるのである。

従来の研究からいえば、埋経の施設の出た場所の地名が多く付せられた。たとえば願主などがはっきりしている鞍馬とか粉河では、鞍馬寺経塚とか粉河寺経塚の名称では当時の実態が伝えられてこないであろう。こうした名称の付せ方はあたかも鞍馬寺が粉河寺が埋経を行った主役だったかのような錯覚をもつはずである。確かにそれぞれの社寺には何らかの関係があったわけではあるが、その主役は別の人だということなのである。

埋経に託したことは人によっては千差万別であった。このあたりを読みとるのが私たちの仕事であり、このことが埋経の本質にせまるということではなかろうか。

（なにわだ・とおる＝文学博士・帝塚山短期大学教授）

注1　京都府に関していえば、福知山市字今安小字大道に位置する豊富谷丘陵遺跡(大道寺跡)の発掘調査の結果はその典型であろう。ご存知のように古墓の発掘調査が進むにつれて埋経の施設が一基発見されたのである。この発見及びその成果が学会に一石を投じたことも周知の事実となったわけであるが、その一つは埋経の経容器として竹製経筒が用いられていたことである。これは、嘉禎2(1236)年に宗快の撰した『如法経現修作法記』や金剛仏子覚源の『如法経私記』などに経容器に竹製が用いられたということを実証したということであり、もう一つはその経典が妙法蓮華経と阿弥陀経だったということが確認されたことである。そのことは竹原一彦氏の「豊富谷丘陵遺跡(大道寺跡)発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号)に詳しいが筆者も竹原氏の報告を踏まえて、「福知山・大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその問題点」(『京都府埋蔵文化財情報』第8号)と「大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその意義」(『京都府遺跡調査報告書』第1冊)の小文を発表した。しかし、この埋経の施設としてはその築造の背景の追究が求められている。

注2　この地上の標識については現在のところまとまった研究はない。従来は、宝塔、五輪塔、宝篋印塔と、平安、鎌倉、室町というそれぞれの時代を印象づけたのであるが、これらの対象物は比較的少なく、本稿で扱うような古絵図資料などを援用し、系統立ててその標識論を展開する必要があろう。

注3　このことについて、埋経の施設については画面に墨書のある神奈川県の称名寺を取り上げたいが、この称名寺は北条実時の開基にかかり、開山は如性房審海と伝えている。称名寺絵図(重要文化財)はその裏書によって元亨3(1323)年にいわゆる結界作法に基づいて制作された結界絵図である。埋経については、画中左端中央あたりに埋経についての墨書、「経塚両界畔相去十丈」とあり、それは浄不浄を区別する朱線のところにある。その絵図に方丈の前に池がえが

かれている。この池の描写を踏まえて発掘調査が行われ、池のその当時の実態が明らかになったことは記憶に新しい。こうした資料の操作は重要である。

注4　三宅敏之氏「遺物と遺構」(『新版仏教考古学講座』第6巻　経典・経塚)。

注5　拙稿「京都・北野天満宮境内の経塚」(『史迹と美術』530号)。これについては、梶川敏夫氏が「北野天満宮発見の経塚出土品」(『京都考古』第24号)として、その経塚の出土品などについて発表されているので参照いただきたいが、すでに発見の際のことについては全く明らかでなかったと書かれている。

注6　この記載は、埋経がどのような立地条件のもとに行われたのか、また、その標識の時代をどのように読むのかといった根幹にかかわることをこの古絵図は示唆しているといえるのであるが、まずそのうちの如法塔からみると、これは金精大明神の境内にえがかれているようであり、『京都古銘聚記』では、「天神社石造宝塔」として扱われているとはいえ、軸部にある銘として、「奉納　三十八所　如法経　□□此塔　礼拝供養　□知是□　□近菩提　□□□□　仏子□□」と判読されている。これ以上は実査しても判読が不可能であるが、これは法華塚についてもいえることでこの塚そのものも今には伝えられていない。心経塚についてはその位置あたりに部材らしきものがあるようであるが、はっきりとはしない。しかし、その絵画表現からすれば室町時代と考えられるものであり、如法塔の銘からはこの神童寺が吉野に擬せられて、山号を「北吉野山」と号していたということは重要なことであろう。諸般の事情で平安貴族がこの神童寺を埋経の地に選んだことはあながち否定できないことであろう。寺伝による開創は吉野の大峯に毒蛇が多く山伏修験者が入山することができなくなったので、この地を吉野に擬したという。

注7　拙稿「経塚研究と"古絵図"(1)(2)」(『月刊考古学ジャーナル』269・271号)。

注8　拙稿「埋経と工芸美術」(『帝塚山工芸』創刊号)。

(図1)　東福寺山内の愛染堂に移築された五輪塔および東向観音寺へ移された五輪塔。いずれもかつて北野天満宮にあったもので、形状からして鎌倉時代中期ごろの制作と考えられるものである。

(図2)　祇園社境内にあった石造の五輪塔。古絵図は元徳3(1331)年に絵師隆円によってえがかれたが、五輪塔はその形状からみてそれよりは年代が上がる鎌倉時代中期ごろのものだろう。

(図3)　神童寺の境内にあった石造の如法塔、法華塚、宝篋印塔。絵画表現とはいえ、如法塔、法華塚は鎌倉時代、宝篋印塔は室町時代とその形状から判断されるが、これは埋経の実態を伝えており、注目される。このうちの如法塔と関係があるかも知れない石造の宝塔が天神社境内にあるが、ちょうど年記銘が刻されていたと思われる行が判読不能であるのが惜しまれる。なお、「如法経」の刻銘は確認できる。

(図4)　池の中島にみえる石造の擬宝珠形の塔。えがかれた賀茂別雷神社絵図は室町時代の社頭景観をつたえているが、この擬宝珠形の塔はそれよりも年代が古く平安時代後期のものでないかと考えられる。

(図5)　石造宝塔(国宝)。鞍馬山には数多くの埋経が行われたが、この宝塔は現在の本堂の下に築かれたもので、その形状からして平安時代後期と考えられる。この埋経の施設からは保安元(1120)年の年記銘の経容器が出土しており、その年代について有力な根拠となろう。

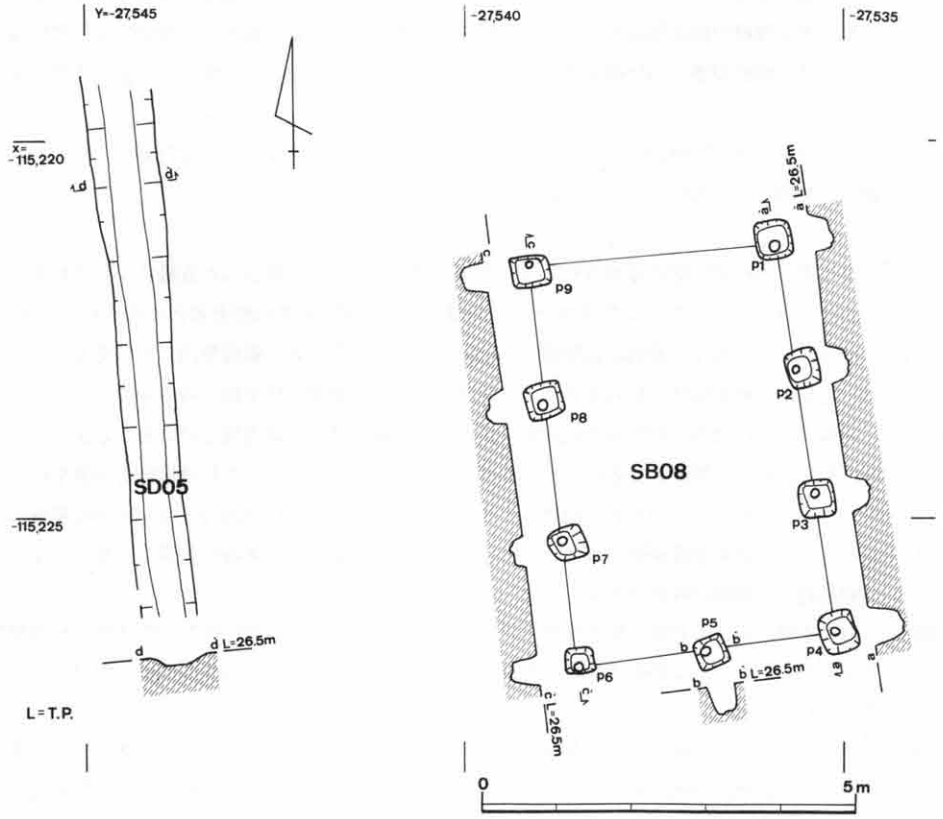
中海道遺跡の再検討（3）

中川　和哉

D．第Ⅳ期　奈良・平安時代

a．遺構

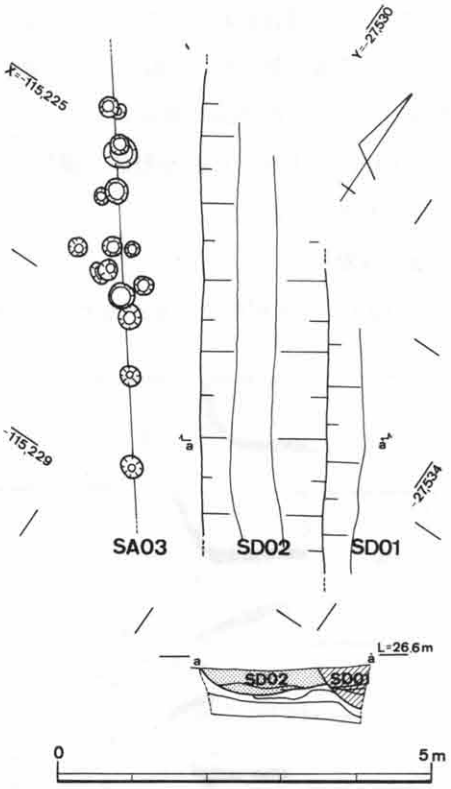
ＳＤ05　北で西に約８°の振り角を持つ、南北方向の素掘り溝である。検出面における幅約90cm・深さ約10cmを測る。トレンチ内での検出長は約７ｍである。出土遺物から平安時代前半には埋没したものと考えられる。ＳＢ08と方位がそろうことから、溝の掘削年代は奈良時代に下がるか、平安時代まで建物が存在したものと想定できる。



第１図　奈良・平安時代遺構平・断面図

ＳＢ08　南北方向に三間、東西方向に二間の規模を持つ掘立柱建物跡である。北で西に約８°の振り角を持つ。柱痕跡はすべての建物で認められ、抜き取り穴等は認められなかった。北側妻部の中央の柱穴は、溝によって破壊されていたが溝の底部がやや抉れており、柱穴があった痕跡とも考えられる。中間寸法は妻部で約1.8m・桁行約1.8mである。柱掘形は一辺が約60cmの正方形で、柱穴の径は約20cmである。建物の年代は、柱掘形内の出土遺物の検討から奈良時代前半と考えられる。

トレンチの西部では方形の掘形を持つ柱穴を数個確認したが、建物としてはまとまらなかった。出土遺物も認められなかったため時期は特定できないが、奈良・平安時代のものと考えられる。



第２図　中世遺構

ｂ．遺物

ＳＤ05　第３図３～５・23が埋土内から出土している。３は黒色土器のＡ類である。残存率が低いため口径は変わる可能性がある。４・５はそれぞれ須恵器の杯、壺である。５は焼成が非常に良い。23は内面に布目圧痕が認められる丸瓦である。焼成はやや軟質である。出土遺物から平安時代前半に、溝が埋没したものと考えられる。

ＳＢ08　第３図１・２の遺物が柱掘形内から出土している。１はＰ1から、２はＰ2から出土している。１は土師器の椀である。暗茶褐色の色調を呈し、内外面には暗文が認められなかった。典型的な平城の土器とは異なる。２は須恵器の杯Ａである。灰白色を呈しやや軟質である。内外面器壁には、水引き線が顕著に認められる。

Ｅ．第Ｖ期(中世)

ａ．遺構

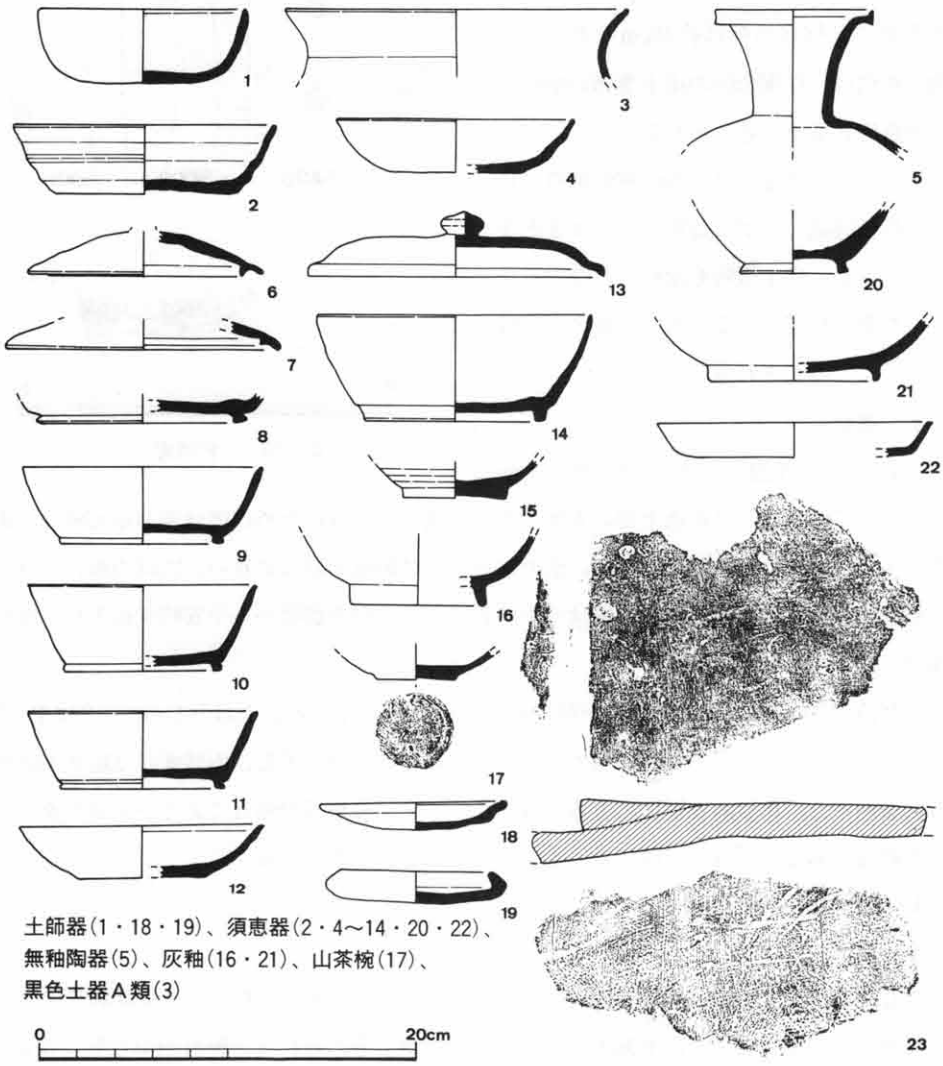
ＳＤ01　現在の物集女街道に並行する溝と考えられる遺構である。東側は調査区外のため検出できなかった。出土遺物から14世紀の遺構と考えられる。検出面からもっとも深いところで約55cmである。

ＳＤ02　ＳＤ01に先行する溝で、ＳＤ01に平行する。溝の東側にはシルトを充填したと考えられる部分がある。このシルトは、この調査地の基盤となっている大阪層群の直上を被覆する黄灰色シルトに似る。出土遺物から13世紀の遺構と考えられる。検出面から最も深いところで約35cmを測る。

ＳＡ03　ＳＤ01・02に平行する柵列である。出土遺物はないが遺構の方向から中世のものと考えられる。

ｂ．遺物

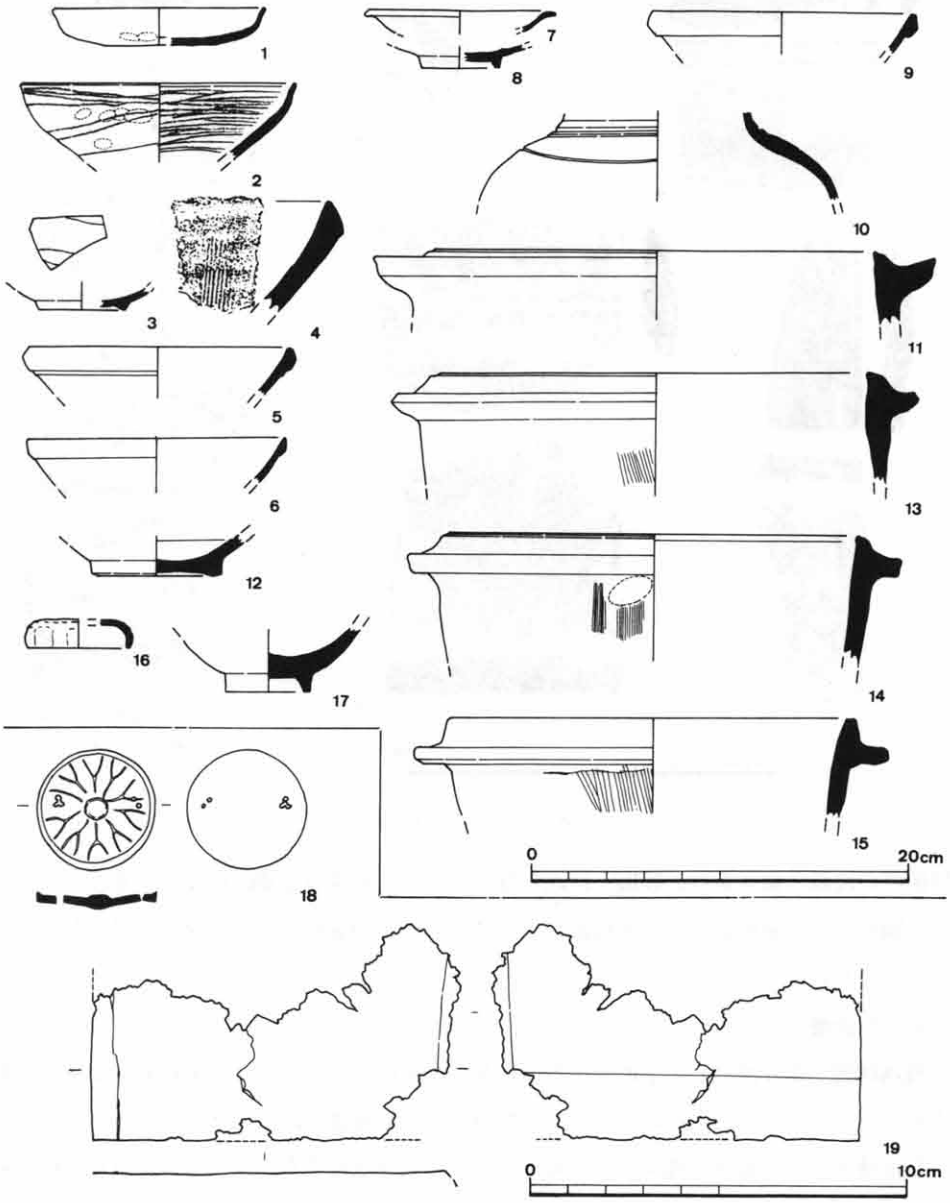
ＳＤ01　第４図の１～６(注1)が出土した。溝がＳＤ02を壊して造られているため、ＳＤ02



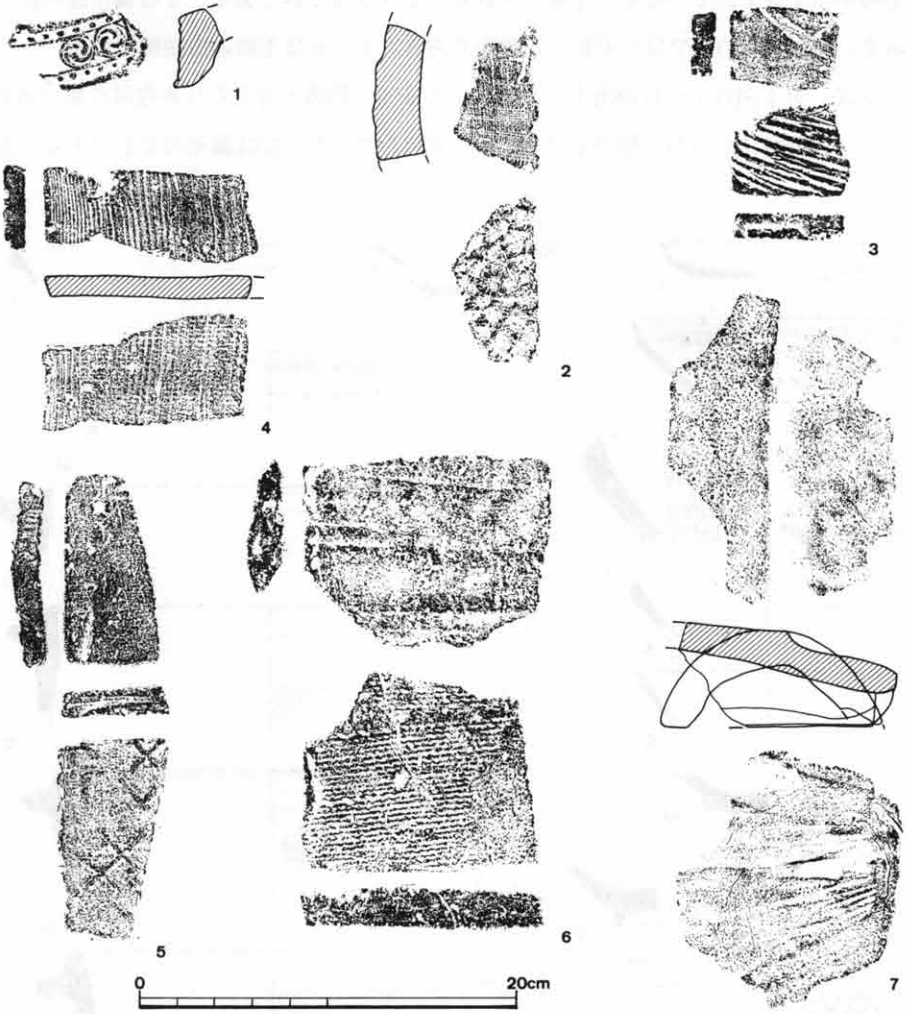
第３図　奈良・平安時代出土遺物(1・2はＳＢ08、3～5・23はＳＤ05、他は包含層)

の遺物が多く含まれているものと考えられる。1～3は瓦器である。4は備前焼の擂り鉢である。出土遺物の中では一番新しい遺物である。5・6は玉縁の白磁椀である。

ＳＤ02　第4図の7～11が出土した。7・8は同一個体と考えられる白磁の皿である。二次的に火を受けたのか、釉が光沢をなくし変色していた。10は褐釉の耳壺である。頸部



第4図　土器及び金属器実測図
(1～6はＳＤ01、7～11はＳＤ02、他は包含層)



第５図　包含層出土瓦

屈曲部の沈線と傾きから、杉山　洋氏(注2)の分類によると有耳壺Ⅰ類C1になると考えられる。他に胴部などの破片がある。土師器の土釜で、古代末の遺物であり二次的に混入したものと考えられる。

Ｆ．包含層

飛鳥時代　第３図の６・７の須恵器の杯蓋のみが出土している。いずれもやや軟質の須恵器である。トレンチ内では図化した以外の当該期の遺物は認められなかった。

奈良時代　包含層内で確実に奈良時代であると見なされるものは、８の須恵器の杯のみであった。

平安時代　９～11・13・14は長岡京前後と考えられる須恵器である。長岡京域内出土の

ものに比べてややシャープさを欠くことから、京外という出土地の特性か、時期的に新しくなるかどちらかの可能性が高いという指摘(注3)を受けた。12・20・22は須恵器である。15は無釉陶器である。16・21は灰釉陶器である。17は山茶椀の底部であり、第1次調査でも出土しており、乙訓ではあまり出土していない遺物である。18・19は土師皿である。第4図の13～15の土師質の土釜が3点出土している。外面にはハケ調整が認められた。

トレンチ内からは瓦が遺物整理箱1個分出土している。平安時代の遺物の多くは、トレンチの西部から出土している。第5図の1は軒平瓦である。巴文が2つ対になり施文されていたものと考えられる。平安時代後期のものとみなされる。2～6は平瓦である。2は分厚くやや軟質で、変形ではあるが格子目をもっていることから奈良時代以前の可能性がある。7は丸瓦で、外面には縄目があったものと思われる。

中・近世　第4図12は白磁椀の底部である。16は青白磁の合子の蓋である。表面には傷が多く、原位置性を大きく損なっていたものと考えられる。17は唐津焼きの椀の底部である。近世の遺物はこれ以外にはほとんど認められない。

時期不明　18は青銅製の円盤状製品である。片面の中央部には円形の凸部があり、沈線によってY字の文様が放射状に施されている。2ケ所に穿孔が認められることから、何かに取付けられて使用されたと想定できる。19は青銅製の板状の製品である。一端に接合面が認められ、反対の側片は破損しているが屈曲部が認められることから一枚の板をおり曲げ箱状の製品を作ったものと見なされる。

当初3回で終了するはずであったが、事実報告に思いのほか多くを費やしたためまとめの部分を次号以下に継続する予定である。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第2課調査第4係調査員）

注1　京都府遺跡調査概報第39冊収録の中海道遺跡第17次の第44図では、出土遺構を誤って記載しているためここで改めたい。

注2　杉山　洋「褐釉系陶磁器の受容と展開－四耳壺を中心として－」（岡崎敬先生退官記念事業会編『東アジアの考古学と歴史』下　岡崎敬先生退官記念論集　同朋舎出版）1987

注3　向日市埋蔵文化財センターの山中　章氏に実見していただき、ご教授を受けた。また、中世の土器については京都府埋蔵文化財調査研究センター伊野近富、森島康雄の両氏に教えを受けた。

平成４年度発掘調査略報

12. 芋　谷　遺　跡

所 在 地　中郡大宮町口大野小字芋谷69番地ほか

調査期間　平成４年11月11日～12月18日

調査面積　約500m²

はじめに　この調査は、農林水産省近畿農政局が進める「丹後国営農地開発事業」の大野団地造成工事中に発見されたため、同局の依頼を受け急遽調査を実施したものである。

芋谷遺跡は、竹野川左岸の狭長な谷奥の底丘陵に位置し、同団地内には、多数の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、すでに小谷城跡・阿婆田窯跡群・アバタ遺跡・池田古墳群・通り古墳群・古土井遺跡等の発掘調査が工事に先だち実施されている。

調査概要　工事中に発見された遺構は、製鉄炉１基・登り窯状炭窯３基・伏焼式の炭窯２基である。製鉄炉は、非常に残りがよく、炉底を焼き固めた後、炉長辺側両側面に幅15～25cm・長さ30～40cmほどの花崗岩の石材を、防湿及び炉構築の際の芯材とするため、側面を掘り込み設置していた。内部は紛炭層が厚くみられ、完全な防湿をはかったと思われる。石材の外側で測った炉の規模は、幅約1.3m×長さ約2.7mであり、長方形箱形炉が想定される。炭窯については、いずれも工事により原形をとどめていないが、登り窯状炭窯については２形態、伏焼式のうち円形のものは直径約80cmほどのものである。

調査地位置図(1/50,000)

まとめ　丹後半島内の製鉄遺跡は、竹野川下流域に密集する傾向があり、今回の発見は、中流域にも製鉄遺跡が存在するという新しい事実が判明し、今後周辺の造成を行う際には注意を要する。また、時期についても、供伴した土師器甕や、周辺で調査された阿婆田窯跡群等からすると奈良時代前半頃のものと推定される。

（増田孝彦）

13. 奈具岡遺跡

所在地　竹野郡弥栄町黒部奈具ほか

調査期間　平成４年６月25日～10月22日

調査面積　約4,300㎡

はじめに　この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の奈具団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて行ったものである。

今回の調査地点は、弥生時代の集落遺跡として著名な奈具遺跡と弥生時代中期の方形貼り石墓がみつかった奈具岡遺跡との間の谷奥に位置し、丘陵とその斜面に立地している。

調査概要　奈具岡遺跡では、丘陵及びその斜面・丘陵間谷部の広い範囲で遺構を検出した。遺構には奈良時代と弥生時代中期の二時期のものがある。

①奈良時代の遺構　掘立柱建物跡、鍛冶炉、炭窯、溝、ピットなどを検出した。掘立柱建物跡は３棟以上、鍛冶炉・炭窯はそれぞれ１基を確認した。

②弥生時代の遺構　22基の住居跡と、溝、ピット、土坑等を確認した。出土土器からこれらの遺構はいずれも弥生時代中期(第Ⅲ～Ⅳ様式)に属するものと考えられる。

住居跡は谷部の平坦面・丘陵斜面・尾根稜線上に設営され、円形、方形、テラス状のものがある。住居跡の大半から、緑色凝灰岩剝片や管玉未製品などの玉作りに関連する遺物が出土しており、玉作り工房群であることがわかった。中でも、ＳＨ06・14・15・23と名付けた住居跡からは、緑色凝灰岩製管玉未製品・完成品をはじめ、凝灰岩を分割する際に用いる玉鋸・玉を磨く砥石・玉に穴をあけるための錐などの工具類が揃って出土しており、緑色凝灰岩製管玉の生産工程を知ることができる。玉鋸や錐など玉を作る工具の製作を行っている住居跡もあった。

調査地位置図(1/50,000)

また、水晶製の玉生産も行っていた住居跡もある。水晶製玉の生産遺跡としては鳥取県西高江遺跡(中期末～後期前葉)・島根県平所遺跡(後期)が知られており、現状では鳥取県西高江遺跡が最古例である。この遺跡の水晶

製玉未製品及び剝片類は中期中頃から後半にかけての土器と共伴することから、西高江遺跡に先行する可能性が考えられる。

まとめ　丹後地域では、これまでに、久美浜町函石浜遺跡・峰山町須代遺跡、舞鶴市志高遺跡等、主要な弥生時代集落遺跡から、緑色凝灰岩～碧玉玉作りに関する遺物の出土が散発的・断片的に確認されている。

今回の発掘調査では、管玉の原石、未製品、製品をはじめ、工具類など一括して検出することができた。これらを上述の遺跡出土資料とあわせて検討することによって、その技法・系譜などを明確にできるものと期待される。

（田代　弘）

14. 下　岡　古　墳

調 査 地　与謝郡加悦町字金屋

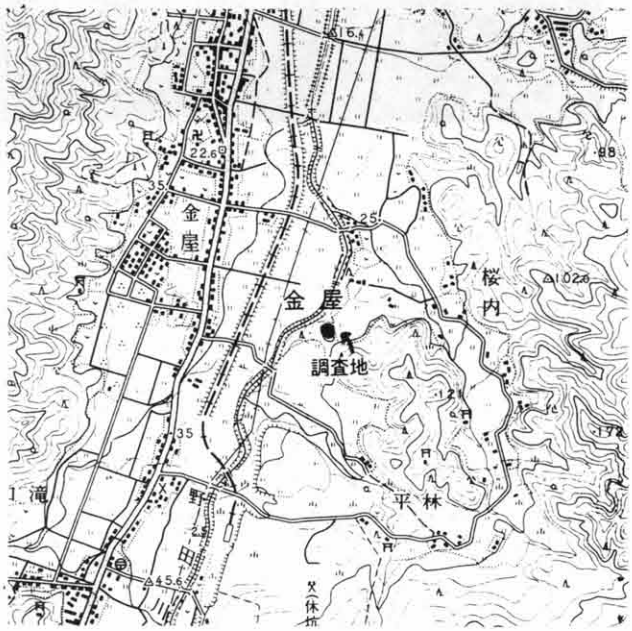
調査期間　平成４年９月22日～12月11日

調査面積　約200m²

はじめに　今回の調査は、一般国道176号線の道路新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。下岡古墳は野田川右岸で、加悦谷の沖積平野部に小高く張り出した丘陵先端部に築かれている。野田川右岸の丘陵上には、蛭子山古墳・鴫谷東古墳群・白米山古墳などの著名な古墳が多い。下岡古墳は加悦谷の平野部でもかなり奥に位置し、ここから北西に広がる加悦谷の街並みを一望できる(第１図)。

調査概要　下岡古墳の規模は、直径約11.5m・高さ約2mを測る。墳形は円墳である。外表施設として、平野側にのみ葺石を施している。その墳丘は、土石混合の盛り土を用いて築かれている。主体部は墳頂中央部から１基検出した。形態は東西主軸(東枕頭位)の木棺直葬である。墓壙の規模は、長軸4.2m・短軸1.35mで、内側に長さ3.3m・幅0.5mの組合式箱形木棺の痕跡を確認した。

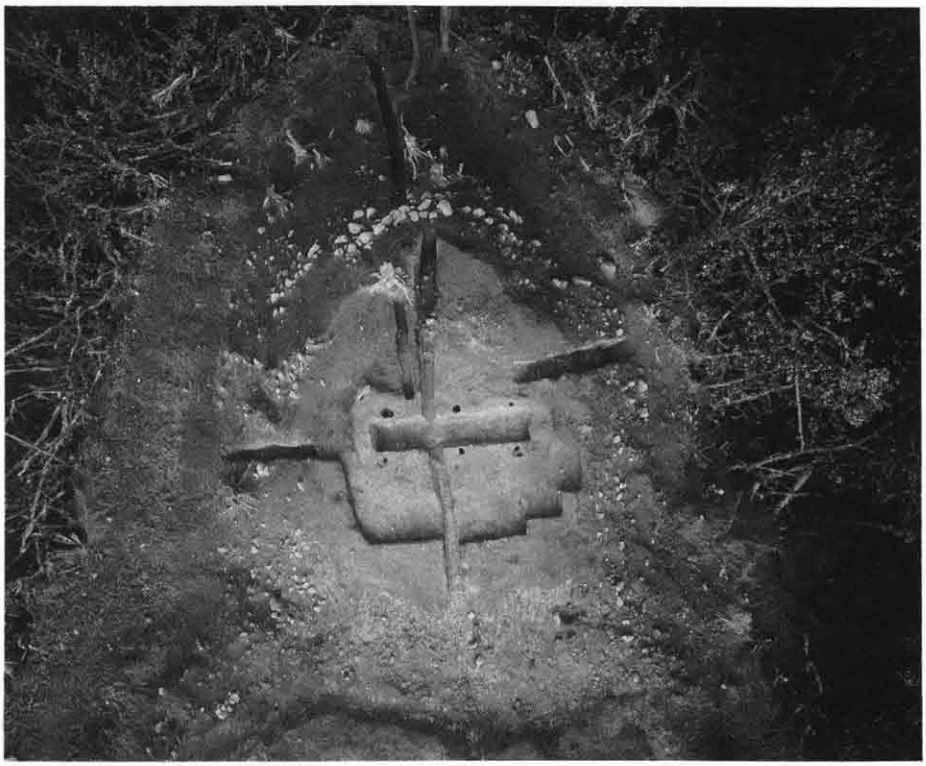
棺の両小口部には、棺のほぼ上面に当たるところに30～50cm大の花崗岩が西側で２点、東側で８点組まれていた。副葬品は棺内のみで、頭位部に土師器杯１点、胸部付近にガラス小玉40数点が出土した。遺物から古墳の築造時期は５世紀後半頃となる。さらに特筆すべきことは、棺の外側長軸に沿って南北３か所(合計６基)の杭跡の並びを検出した。杭は直径10cm前後で打ち込み杭である。杭は、



第１図　調査地位置図(1/25,000)

棺据え付け後に立てられ、墳丘築成に伴い抜きとられたことが判明した。葬送儀礼に伴う何らかの施設と考えられる。今後慎重に検討したい。なお、墳丘盛り土の１つ(黒色土層)から縄文時代の石鏃・剝片などが出土している。

(黒坪一樹)



第２図　下岡古墳全景(航空写真)

15. 鹿　谷　遺　跡

所 在 地　亀岡市薭田野町鹿谷

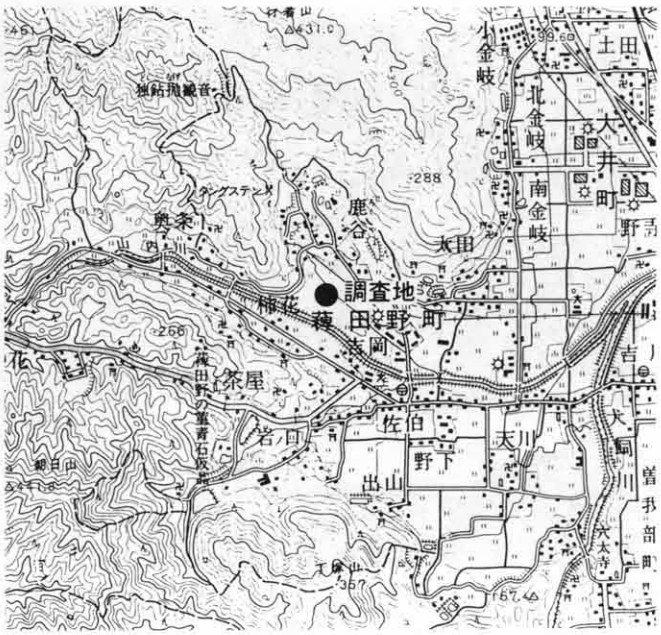
調査期間　平成４年６月12日～11月13日

調査面積　約4,000m²

はじめに　鹿谷遺跡は、亀岡盆地の西方、行者山南麓に展開する集落遺跡である。今回の調査は府営ほ場整備事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。調査地は、篠山盆地から播磨に抜ける道沿いにあたり、付近には、弥生時代前期の集落である太田遺跡や、中世山城である丸勘城など、多くの遺跡が知られている。このために、考古学調査の歴史も古く、すでに明治年間に、英国人ウイリアム＝ガウランドによって石棚付の横穴式石室を持つ鹿谷古墳(現在全壊)が調査されている。今回の調査では鹿谷遺跡は古墳時代を主体とする南丹波有数の大集落であることが判明した。

調査概要　調査地はほ場整備事業の計画に規制され、北西から南東にのびる舌状の尾根筋に計９つトレンチを設定し、遺構の顕著なトレンチについて面積を広げて調査を行った。

古墳時代の竪穴式住居跡は第３トレンチで９棟、第９トレンチで29棟出土した。今回の調査では竪穴式住居跡は５世紀後半・５世紀末から６世紀初頭・６世紀末から７世紀にわたる時期のものであり、方形の掘形で床面に４本の主柱穴を持ち、規模は１辺５m前後のものが一般的である。５世紀代の竪穴式住居跡は、カマドの対辺の壁際に小土坑を設けたものが多い。６世紀末以降には住居内に土坑や周壁溝が認められなくなる。



第１図　調査地位置図(1/50,000)

地山を掘り残して入口状の施設を持つものもある。カマドは住居跡の北辺あるいは東辺に設置され、支脚には、土師器高杯脚部を転用したものと方柱状の花崗岩を利用したものがあり、前者が後者よりも古い住居跡に伴う。

なお、調査区内からは、地震による南北方向に走る噴砂・地割れの痕跡が認められた。第９トレンチのＳＨ9214住居跡では地割れ・正断層に噴砂が伴っている。正断層は、西側が10cm右ズレし、約12cm沈下していた。発掘の結果と寺社の倒壊の文献記録から、地震跡は近世初頭(慶長元年)のものと推定される。

今回の調査による検出遺物の大半は、古墳時代住居跡に伴う遺物であり、その他の時期のものは少ない。５世紀代の土師器には甕・高杯・椀などの器種がみられる。特に、この地域の甕形土器には布留式甕の伝統を引く、口縁端部を肥厚させる形態が500年前後まで存続したことが判明した。また、ミニチュア土器の存在は、屋内祭祀が行われたことを推測させる。このほかに住居跡からは５世紀末の製塩土器のほか、鉄鏃や紡錘車などを検出した。

まとめ　今回の調査成果として竪穴式住居跡が新たに38棟出土し、調査を行った鹿谷遺跡内の古墳時代の竪穴式住居跡が90棟以上にのぼることから、古墳時代中期後半から後期にかけての丹波地方の大集落を想定することができよう。

（野島　永）

第２図　第９トレンチ近景(北から)

16. 平安京右京七条三坊二町

所 在 地　京都市下京区西七条名倉町

調査期間　平成４年９月24日～11月13日

調査面積　約350㎡

はじめに　今回の発掘調査は、京都府土木建築部住宅課が施工する府営住宅西七条団地の建て替えに伴って、同部の依頼を受けて実施した。調査地は、平安京右京七条三坊二町に推定されており、調査地東端では道祖大路の東側築地内溝の検出が予想された。

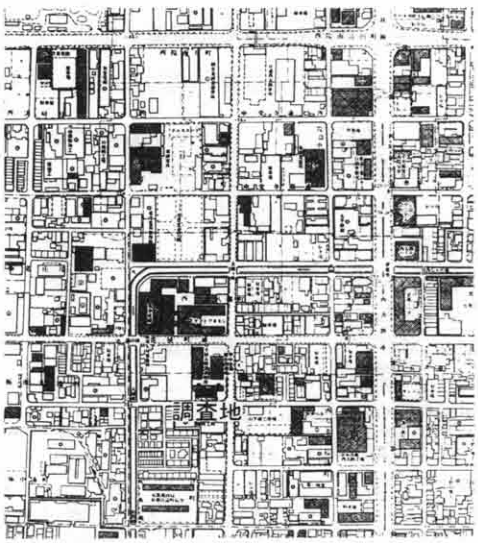
トレンチは、既存の建物の攪乱坑を避け、極力、南側に設定した。また、先に記した道祖大路の東側築地内溝の有無を確認する目的で、幅２mのトレンチを東方へ延長した。

調査概要　トレンチ北半部は攪乱を受け、遺構・遺物は検出できなかったが、南半では**柱穴・耕作溝**を検出した。柱穴は基本的に直径40cm前後の円形を呈しており、細片ではあるが、**緑釉陶器・灰釉陶器**等の土器片が出土している。トレンチ中央では、東西２間×南北２間以上の総柱の掘立柱建物跡を１棟検出した。建物跡を構成する柱穴からは平安時代の遺物が出土しているが、柱穴が直径30～40cmの円形であることや、総柱であることなどから、中世に属する可能性がある。建物跡の帰属時期については、土器の整理後、十分検討を加える必要がある。

トレンチ全面で検出した溝は、すべて耕作溝であり、切り合い関係から建物の廃絶後、耕地化したことが推定される。

まとめ　今回の調査では、平安時代の遺構を検出できなかったが、土器の出土が見られることから、同時代に何らかの土地利用が想定される。なお、東方へ延長したトレンチでは、道祖大路の東側築地内溝は検出できなかった。

（小池　寛）



調査地位置図(1/10,000)

17. 内里八丁遺跡

所在地　八幡市内里日向堂

調査期間　平成4年4月27日～12月18日

調査面積　約2,500㎡

はじめに　今回の発掘調査は、京都南道路(旧称第二京阪道路)の建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。内里八丁遺跡では、これまでの調査で、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物跡群や弥生時代後期の水田跡などが検出されている。今回の調査地は、これまでの調査地の北側にあたり、同時期の遺構・遺物の存在が予想された。

調査概要　調査の結果、中世、平安時代、飛鳥・奈良時代、弥生時代後期末の各時期の遺構・遺物を検出した。以下、おもな遺構・遺物について略述する。

調査区南東で検出した平安時代前半の井戸ＳＥ04は、井戸枠に建物の建築部材を転用しており、中からは黒色土器や横櫛などが出土している。

調査区中央を南北にのびる飛鳥時代の溝ＳＤ53は、近世溝に切られているが、多量の須恵器・土師器が出土している。調査区西側の大型掘形を持つ掘立柱建物跡ＳＢ10、ＳＢ15は、溝ＳＤ53とほぼ方位を同じくし、同時期である可能性が高い。このほか、掘立柱建物跡や柵列、ピットなどを検出しており、今後、詳細な時期について検討していきたい。

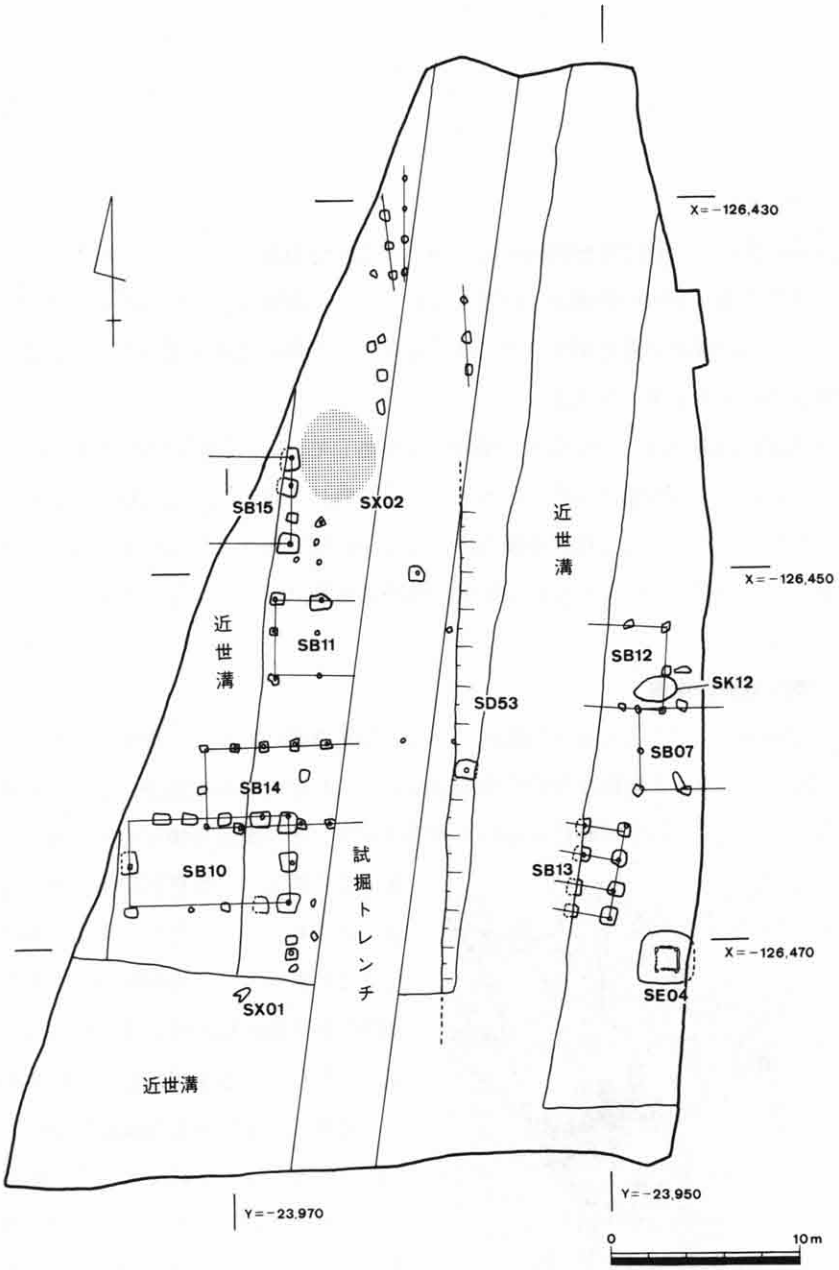
弥生時代後期末の顕著な遺構を確認することはできなかったが、調査区北西でＶ様式終末～庄内式併行の土器群(土器溜りＳＸ02)を検出した。土器溜りＳＸ02から出土した遺物の大半はＶ様式系の甕形土器であるが、数点の河内型庄内甕(生駒山西麓産)も確認している。また、包含層から庄内式～布留式の土器が出土している。

第1図　調査地位置図(1/25,000)

まとめ　今回の調査では、これまでの調査と同時期の遺構・遺物を確認した。したがって内里八丁遺跡は、弥生時代後期末を中心とする時期と、飛鳥・奈良時代を中心とする時期にそれぞれ盛期があったと思われる。特に、溝ＳＤ53は方格地割あるいは条里に関わる区

画溝である可能性をもち、古代の官道(古山陰道)との関わりも含めて周辺地域での調査が期待される。

(筒井崇史)



第２図　遺構配置図

資料紹介

遠所遺跡出土木簡

土橋　誠

1．はじめに

遠所遺跡群は、京都府竹野郡弥栄町に所在する生産遺跡をはじめとする遺跡の総称で、ニゴレ古墳のある丘陵の谷奥部に位置している。この調査は、農林水産省近畿農政局が推進している、丹後国営農地開発事業に伴うもので、同局の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。

遠所遺跡群の調査は、1987年から継続して実施している。今回紹介する木簡が出土した調査は、1991年から92年にかけて行われた。この時は、遠所31・32号墳やその他の地区も調査が行われたが、ここでは、木簡の出土したほぼMD地区と呼ばれている調査地にしぼって記述していくが、必要に応じて従来の成果にも触れていくことにする。

2．検出遺構の概要

遠所遺跡群は、主として6～13世紀にわたる生産遺跡のほか、5世紀末から6世紀にかけての24基からなる古墳群などから構成される(注1)。これまでの発掘調査により、生産遺跡では、奈良時代後半から平安時代にかけての製鉄炉及びその関連遺構が中心である。1990年度までの調査で、須恵器登窯4基、製鉄炉8基確認されている。ただ、このなかに、2基だけではあるが、6世紀後半にさかのぼる可能性のある製鉄炉が確認されており、丹後地域のみならず、わが国における鉄生産の伝播などを考える上で重要な遺跡となっている。

第1図　遠所遺跡群MD地区位置図(1/50,000)

1991年度では、奈良時代後半の鉄滓が捨てられた場所と考えられるところの下層部を調査した。ここでは、6世紀後半頃の竪穴式住居跡が何度も建て替えられた状況で検出され

た。しかも、竪穴式住居跡の床面近くで炉壁と思われるような焼土塊も出土したため、この年度の調査でも、古墳時代後期に鉄生産のための鍛冶炉が存在した可能性を示す資料が出てきたのである。木簡が出土した調査地は、これらの住居跡が検出されたところよりも少し谷部にあたり、古墳時代後期と奈良時代後半以降の、大きく二時期に分けられる遺構や遺物が見つかった。(注2)

調査地の中央部では、南北に流れる流路跡が合計５本見つかっている。そこから、須恵器・土師器などの土器類のほか、紡錘車・砥石・叩き石などの石器類、琴柱や織機の一部、下駄・木製農具・建築材などの木製品、木の実・貝殻といった生活関連用品など、かなりの量が出土している。

また、流路の周辺部では、ほとんど削平された竪穴式住居跡や、多数の柱穴が検出された。これらは、出土遺物からおおむね奈良時代後半の遺構と考えられている。(1)の木簡が出土したのは、これらの柱穴が検出された面であり、年紀はないが、時代的にはやはり奈良時代後半と考えてよいものである。その他の遺物はほとんどないが、流路中の遺物には、生活関連用品のほか、ミニチュア土器や土馬などの祭祀関連遺物も存在している。この木簡の性格を考える上で重要な要素であろう。

その他、時期は奈良時代後半と推定されるが、時期を示す明確な遺物がほとんど出土しなかった遺構として、砂鉄埋納土坑がある。ここにはかなりの量の砂鉄が埋まっていたが、(2)の木簡はこの土坑内から出土した。

3．木簡

(1)

（符籙）

011

95×85×9

(2)

「＜余戸郷□真成田租籾五斗＜」

031

297×20×6

(1)の木簡は、先にも触れたように多数の柱穴が見つかった面で出土した。木簡の形態は、ほとんど正方形に近い長方形で、中央に小さい孔があいている。中央部から四隅に対

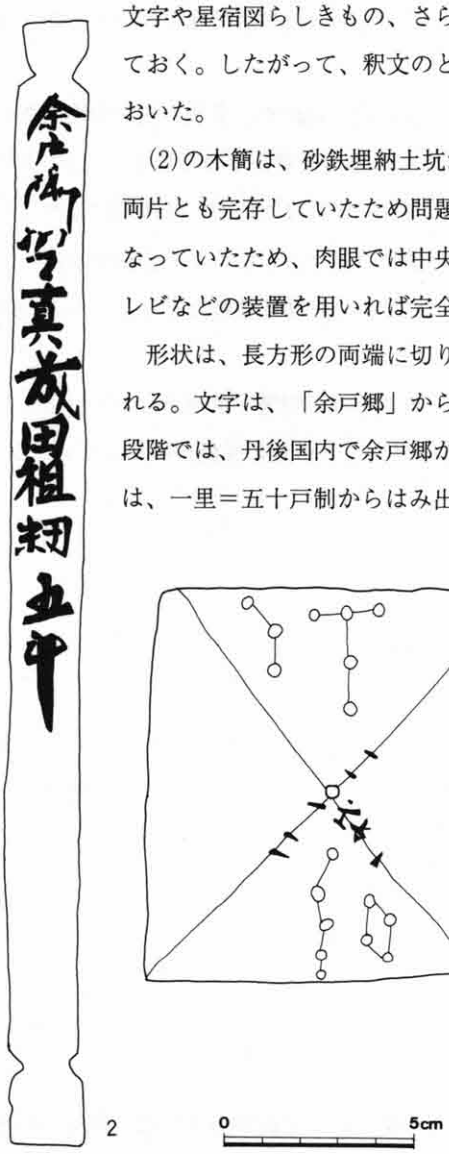
して線を刻んで四分割しており、この孔に何か細い棒を突き刺して回転させたのかもしれない。この木簡には板目材を用いている。(注3)

墨痕は、刻線上に沿って存在しており、文字とすれば数文字分あるが、いずれも判読はできなかった。刻線で四分割したうち、短辺の側にはいずれも星宿のような文様が見えている。この文様が何を意味するかは不明であるが、その他の遺物にミニチュア土器や土馬などの祭祀関連遺物があることから、あるいは呪術や祭祀に用いた可能性が高い。むろん、棒を回転させることによって遊ぶ玩具のようなものであった可能性もあるが、現時点では、文字や星宿図らしきもの、さらに伴出遺物の存在から、何らかの祭祀用具と見ておく。したがって、釈文のところには文字が不明なので、「符籙」としていおいた。

(2)の木簡は、砂鉄埋納土坑から出土した。木簡は二片に割れて出土したが、両片とも完存していたため問題なく復原できた。文字については、表面が黒くなっていたため、肉眼では中央部の文字がほとんど判読できないが、赤外線テレビなどの装置を用いれば完全に解読することができた。

形状は、長方形の両端に切り込みを入れるタイプで、荷札木簡によく用いられる。文字は、「余戸郷」からはじまり、国郡名は不明である。『和名抄』の段階では、丹後国内で余戸郷が見えるのは、加佐郡のみであるが、本来余戸郷は、一里＝五十戸制からはみ出た分の戸を集めて一郷としたものであるから、理論的にはどこの郡内にも存在した可能性はある。(注4) 遺跡は、竹野郡に所在するため、竹野郡にかつて存在した余戸郷か、あるいは加佐郡余戸郷の可能性が存在することになる。

次の文字は「[illegible]」とあって、一字か二字かいずれとも決めがたい。特に、下の部分が「マ」のようにも見えるので、二文字とすれば、「物部」や「海部」あるいは「私部」などの氏名(うじな)の可能性が高いが、スペース的には一文字分であることや上部の文字がはっきりしないため、現時点では不明としておいた。



第２図　出土木簡見取図

「真成」は、一般的な荷札木簡のあり方から考えて、人名と見られる。それも、名前の部分だけと見られる。一般に荷札木簡は一枚だけで機能するのではなく、一つの俵にいくつも木簡を付けると考えられるので、国郡名や詳しい人名などは他の木簡に書かれていたのであろう。

「田租籾」は、いわゆる租のことである。田租は、律令の規定では、田令・田長条に「段租稲二束二把、町租稲廿二束」とあり、穎稲で納め、一部を年料春米として中央へ納入することになっていた。しかし、実際には国内の諸経費は公出挙による利稲でまかなっており、年料春米もこの利稲の一部を春いて中央へ納入していた。(注5) 田租も、規定どおりの穎稲ではなく、穀の形態で納入されたらしく、正倉院文書として伝来した正税帳などには、穎稲で記述されている。しかも、田租は、賑給などの中央政府の政策と関係する以外は各郡ごとに設けられた正倉－いわゆる不動倉－の中に備蓄されていた。(注6)

今回、遠所遺跡で見つかったこの木簡に「田租籾」の記載があることは、この不動倉から田租が支出されていることを示している。不動倉が開けられるのは、先にも示したように、8世紀では賑給などのような中央政府の命令のあったときである。賑給のときは、太政官符や民部省符のかたちで全国の国衙へ命令が伝達されるようである。この木簡が鉄生産と関係の深い砂鉄埋納土坑から出土したことから考えて、この命令形態を参考にすれば、木簡に書かれている田租も中央政府の命令でこの地へもたらされたとも考えられる。そうすると、遠所遺跡における奈良時代の製鉄作業には、何らかの形で中央政府が関与していた可能性もあるわけである。

ただ、現在の研究段階では正倉における田租の管理がどのような状態で行われたか、今一つはっきりしていないため、簡単に上記のような結論をだすことはできない。あるいは、8世紀後半の神火などに見られるように、(注7) 公費の私的使用があったことからみて、国司か郡司の誰かが私的に田租の籾と称する稲を運んだことも考えられるので、今は可能性だけを指摘しておきたい。

4．まとめ

これまで見てきたように、遠所遺跡群で見つかった木簡はまだ2点にすぎない。今後、もっと多くの木簡が見つかる可能性があり、その時点で8世紀後半以降の鉄生産の性格なども解明されることと思う。ここでは、何らかの祭祀に用いられた可能性のある呪符のような木簡と、「田租籾」の記載から8世紀以降の鉄生産において何らかの形で中央政府が関与した可能性のあることを指摘した。

まだ、遠所遺跡群の調査は、継続しており、今後の遺物の整理を通じて、一層、この遺

跡群の性格が明らかになることを期待したい。

なお、これらの木簡の釈文の作成や解釈にあたっては、奈良国立文化財研究所の綾村宏氏、舘野和己氏、森　公章氏、渡辺晃宏氏、神戸大学大学院鈴木景二氏のご教示を得た。ここに記して謝意を表したい。

（どばし・まこと＝当センター調査第１課資料係主任調査員）

注１　増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第39号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991.3、増田孝彦・岡崎研一・石崎善久「丹後国営農地関係遺跡(東部地区)」（『京都府遺跡調査概報』第50冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992.3

注２　「弥栄町遠所遺跡・遠所古墳群」（京埋セ現地説明会資料 No.91-20　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991.11.29

注３　拙文「京都・遠所遺跡」（『木簡研究』第14号　木簡学会）　1992.11

注４　新野直吉『日本古代地方制度の研究』　吉川弘文館　1974、第二章第三節

注５　早川正八「律令財政の構造とその変質」（『日本経済史大系』１古代　東京大学出版会）　1965

注６　舟尾好正「賑給の実態に関する一考察－律令制下の農民支配の一側面－」（大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』　吉川弘文館）　1976

注７　国司や郡司が私的に不動倉を開けて、租穀を流用していた可能性は存在する。８世紀後半に頻発する神火は、その証拠隠滅を図ったこともその原因の一つとも解釈できるからである(新野直吉・前掲書、第三章第二節)。

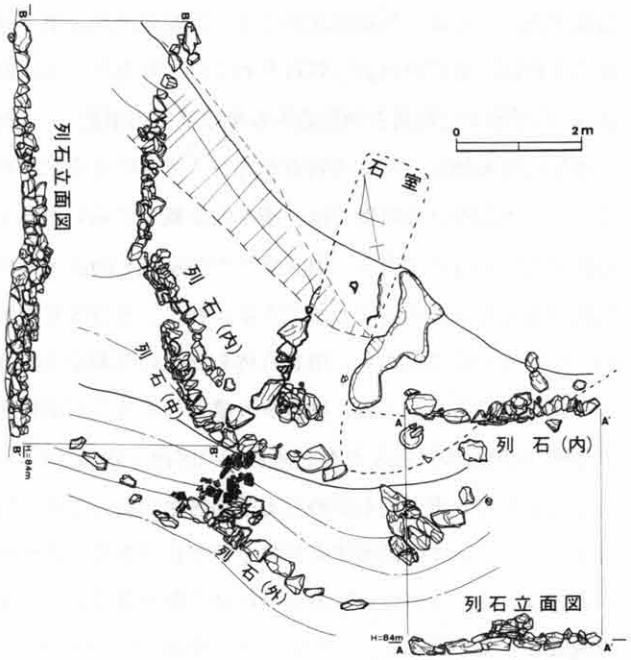
研究ノート

3重の列石がめぐる後期古墳2例

小池　寛

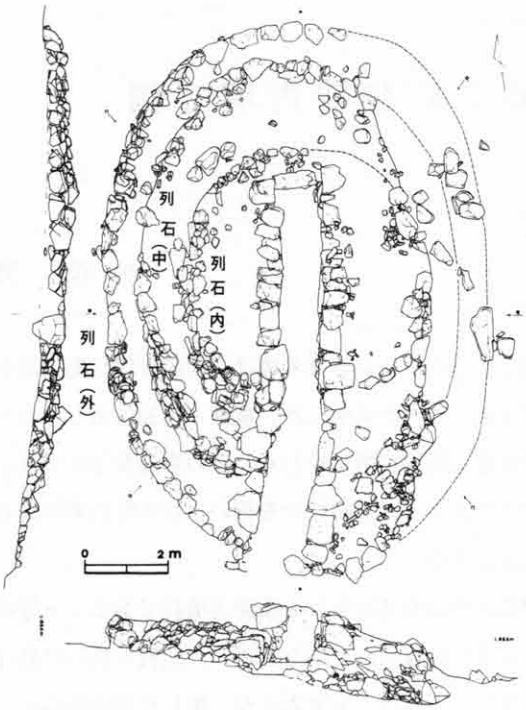
はじめに　京都府綾部市位田町大字細谷に所在する細谷9号墳は、開発に伴う発掘調査によって、3重の列石がめぐる後期古墳であることが判明した。綾部・福知山市を中心とする中丹地域では、このような外表施設をもつ後期古墳は珍しく、その系譜などが今後、問題になるところである。ここでは、短文ではあるが遺跡紹介を行い、兵庫県八鹿町箕谷3号墳を類似資料としてあわせて掲載・記述する。

綾部市細谷9号墳　細谷古墳群は、現時点では9基からなる後期古墳群である。9号墳の西側列石は、隣接する2号墳の墳丘盛り土で被覆されていたために、比較的良好に残存している。西側列石は、墳丘北側から西側にかけては1列であるが、墳丘前面の列石が屈曲する部分で、内側の列石と中側の列石に分岐し、中側の列石は、石室羨門部を区画するように配されている。また、内側列石は、石室西側の側壁で結合させ、石室東側の側壁から東方へ更にめぐらせている。外側の列石は、内・中列石とは異なり、墳丘西側から石室前底部を取り囲むようにめぐらせている。



第1図　京都府綾部市細谷9号墳(1/120)

石室・墳丘北東部は、後世の開発によって消失している。出土遺物から陶邑TK209前後に築造されたと



第２図　兵庫県八鹿町箕谷３号墳(1/180)

考えられる。

兵庫県八鹿町箕谷３号墳　箕谷古墳群は、５基からなる後期古墳群で、２号墳からは「戊辰年五月□」の銘文をもつ大刀が出土している。３号墳は、南北13.5m・東西9.5mの楕円形墳で、内側の列石はほぼ円形にめぐらされているが、中・外側の列石は石室の主軸線に長軸をもつ楕円形を呈している。内側の列石は、玄門部に結合しており、外側の列石は、羨門部で石室側壁と結合している。出土遺物から陶邑編年ＴＫ217・ＴＫ46の築造と考えられている。

京都府北部の列石がめぐる後期古墳の類例としては、岩滝町千原古墳などが確認されており、箕谷古墳群の報告書によれば、兵庫県北部では、22基の後期古墳が確認されている。確認された基数からすれば、墳丘の外表に列石をめぐらす行為は、兵庫県北部に集中することが指摘できよう(八鹿町文化財調査報告書第６集「箕谷古墳群」　1987.3)。

墳丘の外表施設としての列石を箕谷３号墳のように３重にめぐらす例と、石室前面にのみめぐらす細谷９号墳例では、基本的な概念に違いがある。しかし、墳丘盛り土上に列石が露呈していることから、墳丘盛り土の崩壊を防止する目的よりも、墳丘自体を区画する目的があったと考えることができる。特に、箕谷３号墳例は、墳丘に整然と３重の列石をめぐらせていることから、墳丘自体を周辺の空間から区画する目的があったものと考えてよい状況下にある。一方、細谷９号墳例のように石室前面にのみ３重の列石をめぐらせている例は、墳丘の区画よりも石室自体の区画を意図していると考えたほうが蓋然性が高い。

このように３重の列石がめぐる後期古墳であっても、列石の正確な位置関係を把握することによって、その区画する対象を類型化できる可能性が指摘できる。

著者は、かって木柱による聖域区画の類型を考えたことがあるが、後期古墳における外表施設としての列石について、今後、検討していきたい。

（こいけ・ひろし＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

研修だより

中国研修に参加して

－文化財保護研究者訪中団、訪中報告－

小池　寛

全国の埋蔵文化財の発掘調査を担当する機関のうち、特に財団法人で運営されている全国埋蔵文化財法人連絡協議会・近畿ブロックの代表者が、日常の発掘調査の成果を広く東アジアの中で位置付けることと、発掘調査の担当者が見識を広めることを目的として、今回の海外研修事業が計画され、その団体名も**「文化財保護研究者訪中団」**と命名された。参加団体は、合計８団体で、総勢20名のグループであった。

当調査研究センターからは、総務課課長補佐　安田正人、調査第１課企画係長　水谷壽克、調査第２課調査第３係主任調査員　石井清司、同第２係調査員　小池　寛が参加した。期間は、1992年10月29日(木)から同年11月５日(木)の八日間で、北京・西安・咸陽・上海にて研修を受けた。以下、研修を行った見学先などについて研修参加者４名が討議を行い、小池がまとめ、その報告文としたい。

1992年10月29日(木)

大阪空港に９時集合。これからの中国研修にやや緊張気味で参加者全員の集合を確認する。10時55分大阪空港を離れ、13時40分に**北京**に着く。北京に到着後、**中国社会科学院・考古研究所**へ表敬訪問を行う。所長は、欧州へ出張されているとのことで、副所長・各研究室主任諸氏との懇談を行った。研究所の構成は、原始社会考古研究室・商周考古研究室・漢唐考古研究室・編集室・実験室・技術室・図書資料室からなる。考古研究所が研究の目的として取り組むテーマは、「中国の新石器時代の文化様相の解明」「中国の新石器時代の文化の類型(時代区分など)」「中国文明の起源」「夏の文化・商周の社会経済史の研究」「中国古代都城の起源と発展過程の解明」「小数民族の歴史研究」「中国と他国との文化交流」の７点であることの説明を受ける。一方、訪中団から「中国の発掘調査の現状」「最古土器の年代」「新しい時代は、どこまで調査の対象とするのか」などの質問が出され、１時間30分の表敬訪問を終了した。 [宿泊；北京・前門飯店]

1992年10月30日(金)

８時にホテルを出発。長陵・献陵・景陵・裕陵・茂陵・泰陵・康陵・永陵・昭陵・定

陵・慶陵・思陵・徳陵からなる明の十三陵の内、**定陵**を見学する。定陵は、第14代神宗万暦帝の陵墓で、６年の歳月と２年分の国家予算を費やしただけあって、想像を絶する規模に参加者一同驚嘆する。その後、**八達嶺長城**に向かう。紀元前500年頃の周代に築造され、秦の始皇帝が30万の軍兵と数百万の農民を動員して完成させる。120m毎に烽火台を設ける。考えていた以上に急な登り坂であり、参加者の２割が最上位の烽火台に行けず、途中で下る。なお、京都の４名は、無事完登した。

八達嶺からの帰路、長城の九カ所の関所の一つである**居庸関**を見学する。壁面には、漢字・チベット・パスパ・ウイグル・サンスクリット・西夏文字とインドネシアの神鳥ガダールと女体を模した蛇ナーダが描かれているらしいが、少々、薄暗いため、全てを確認できなかったのが悔やまれた。ホテルに到着後、玄奘三蔵で著名な孫悟空を主題とした京劇を観劇する。華やかな舞台衣装と化粧に興味が集中するとともに、一人一人の演技が軽快で、曲技の正確さに驚嘆する。21時からは、**中国社会科学院・考古研究所所員の方と有志にて懇談会**をもつ。

1992年10月31日(土)

９時過ぎ、天安門広場を見学。広大な空間に毛沢東の肖像画が見える。中華人民共和国万歳のスローガンと風にはためく国旗、黄色の瑠璃瓦と紅殻色の壁、天安門事件の映像を時折、思い出しながら、複雑な思いを胸に**歴史博物館**を見学する。博物館内の展示は、超一級資料ばかりで、中国の歴史の厚みを痛烈に感じた。

博物館は、故宮の入口右側に位置しており、見学後、すぐ故宮に向かう。太和殿・中和殿など、その精緻な建造物と石像など、まさに映画「ラストエンペラー」の世界が展開する。本来の予定ではなかったが、永寿宮にて文物精華展を見学する。展示関係の責任者である女性学芸員の説明を全てに渡って受け、深い理解が得られた。

帰路、**瑠璃廠**において、中華書局・文物出版社などの書籍、慶雲堂・観復斎・栄寶斎などの文房四宝などを購入する。

1992年11月1日(日)

天壇公園は、明・清代の歴代皇帝が五穀豊穣を祈った祈年殿を中心に造られた公園で、祈年殿は、高さ38mを有し、1896年に再建され、当時と同じように釘を使用しない建造技術が踏襲されている。その後、予定通り、12時30分発、中国国際航空CA1201機にて**西安**へ向かう。西安に着くとすぐ、高速自動車道で**大明宮麟徳殿**とその博物館を見学する。大明宮は、西壁2.3km・東壁2.6km・北壁1.2km・南壁1.7kmの楔形を呈する。貞観８(634)年に離宮が造られて後、歴代皇帝が住まいとした。麟徳殿は、総面積12,300㎡の宮殿であり、礎石などを復原してある。麟徳殿見学後、同じ大明宮内の**含元殿**(写真１)へ行く。含元殿

は大明宮の正殿で、龍朔3(663)年に完成した建物である。現状は、小高い丘であり、当時の面影は一切なくなってしまっており、子供達の良い遊び場として活用されている。平城宮などは、長安城をモデルにして造営がなされたと知っていても、両者の規模の違いには、唯々、驚かされるばかりで、中国と日本の歴史の厚みの違いを痛感した。

写真1　大明宮含元殿

大雁塔(写真2)は、慈恩寺境内に建つ塔で、648年に唐の高宗が亡き母文徳皇后を忍んで建立したもので、現状では七層である。先の八達嶺長城と同じく、最上層に登るには、非常に体力を必要とする研修場所であった。最上層からの西安市街地の遠望は、その規模の大きさを感じる絶好の機会となった。 |宿泊；西安・西安賓館|

1992年11月2日(月)

先ずは、**半坡遺跡**の博物館と屋内展示場へ行く。当該遺跡は、仰韶文化の標識遺跡であり、10,000㎡の調査地内で環濠と住居址を検出している。屋内展示場は、文化層の認識ができるようにセクションを残した方法で公開されている点が有用であった。弥生時代の環濠集落を論じる際、必ず類例として挙げられる遺跡ではあるが、規模の違いを痛感せざるを得なかった。次いで、**始皇帝兵馬俑坑**とその博物館を見学した。言うに及ばず、良く知られた遺跡ではあるが、規模の大きさに驚くばかりであった。兵馬俑や銅車馬の精緻さとその規模の大きさは、今も、脳裏を離れない。15時から**陝西歴史博物館**の見学を行う。展示面積と展示品の多さに圧倒される。常設展示以外に、青銅器展・壁画展の特別展示も見学できた。各自見学したが、見学中、訪中団の団員に一回も会わぬほど、広く、北京歴史博物館と同様、3時間弱では、全部を正確に見学できなかった。機会があれば、また、訪れたい博物館である。

写真2　大雁塔

1992年11月3日(火)

6時に起床し、石井・小池両名で**小雁塔**に向かう。

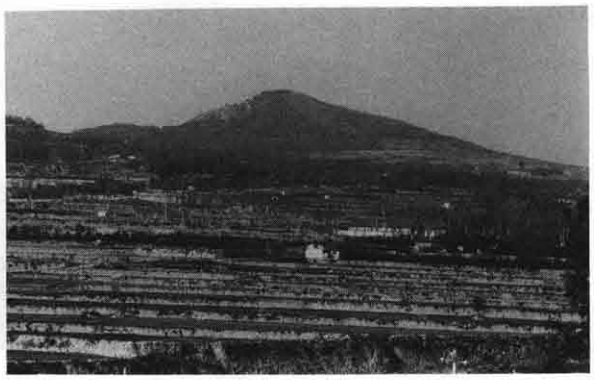


写真３　永泰公主墓墳頂から乾陵をのぞむ

まだ薄暗いが、小雁塔公園では、太極拳を楽しむ人々で活気に満ちていた。その後、乾陵の陪塚である**永泰公主墓**へ向かう。永泰公主李仙恵は、中宗の七女で、武延基と結婚するものの、祖母則天武后の怒りにふれ、大足元年(701年)、武延基と共に、処刑された。則天武后の死後、復辟した中宗により、神龍２年(706年)、乾陵に陪葬された。墓室内には、両壁に副室が設けられ、陶俑や青銅器などの副葬品を入れる。玄室内には、線刻で加飾された家形石棺がおかれる。墳頂から乾陵を見たが、陵と言うよりは、独立丘陵と言うべき迫力があった。その**乾陵**(写真３)は、唐代第３代皇帝高宗と則天武后の合葬陵である。参道には、蕃酋石像などの石刻群が両サイドに並ぶ。その規模たるや日本の大仙陵などとは比較にならぬ程大規模である。

今までの研修は、一般的な見学コースであったが、**漢陽陵**は、実際の発掘現場の見学となった。漢茂陵・漢平陵・漢延陵・漢康陵・漢渭陵・漢義陵・漢安陵・漢長陵の一群で最も東方に位置する。泾阳・張家湾の俑坑を見学するが、深さ7mの俑坑は、我々が日常的に調査を行っているトレンチとは、全く異なった概念でしか理解できない「遺構」であった。陽陵は、前漢四代目の景帝の陵で、方形陵各辺に参門をもつ。調査地自体は、遠くからの観察であったために遺物の出土状況などは正確に把握できなかったが、平板測量図自体に色鉛筆で採色する方法は、単色図化に慣れてしまっている我々も採用すべきであると話し合う一幕もあった。発掘調査事務所には、張家湾の一民家を借用しており、民家内部の観察ができる唯一の機会でもあった。事務所では、陽陵俑坑から出土した陶俑などの遺物の説明をして頂いた。陶俑が持っていた武器類も全てミニチュアで精緻に作られており、特に、五珠銭のミニチュアには一同驚嘆した。　[宿泊；咸陽・秦宝賓館]

1992年11月4日(水)

本来の予定では、14時50分発、中国西北航空便で上海着であったが、予定変更となり、８時25分発、**上海**(着10時45分)となった。上海は、今まで見てきた中国とは、全く異なった空間で、同じ社会主義国とは思えぬ程、繁栄していた。上海最大の繁華街である**南京路**の百貨店で、実用品と土産を求めて実地研修を行う。その後、**豫園**を見学する。豫園は、1859年から18年もの歳月をかけて、潘允端が両親のために造った清代の名園で、荷花池を

中心とし、現代ではショッピング・露店の食べ歩きと人も多い。その夜、最後の夕食でもあり、上海蟹と上海独特の料理で、宴を催し、実質的な研修の反省会となった。 [宿泊；上海・上海大厦]

1992年11月5日(木)

上海博物館は、1階が売店・2階が青銅器展示・3階が陶磁器展示室・4階が絵画などの展示室からなる。展示品は収蔵品の極く一部で、収蔵点数は10万点以上あると言う。青銅器展示室は、時代毎の配列ではなく、武器・器などのようにテーマ毎の配列である。特に、我々が驚いたものに石歳山漢墓(前漢)出土の詛盟場面貯具器がある。高床式住居の周囲に、100余人が集まり、祭祀を行っている場面を描く。銅鼓あり、立柱ありで祭祀儀礼の状況を良く伝える。陶磁器類は、実に展示品の数量が多い。理解を深めるための編年的展示方法は、中国陶磁器の流れを概ね把握することができる有用な展示であった。

上海空港から一路、日本に向けて飛び立ち、18時30分前後、**大阪空港のロビーにて解散式**などを行う。1週間に及ぶ長い研修で各々いろいろなことを感じ、考えたが、これからの業務に十分行かすようにとの河島団長の挨拶で幕。今後の情報交換を約束し、再見。

今回の研修は、中国そのものの理解と、中国の文化遺産を見学する目的があり、研修者各自の熱心な探求心により、その目的の多くは達成できたと考える。日本の埋蔵文化財の規模と中国のそれでは、大きく異なる点が多く存在することを身をもって感じられた。今まで、東アジアの中での日本を位置付けるために沢山の書籍を概観してきた各研修者の一定した見解は、「百聞は一見にしかず」である。今後も日中文化交流について考えてゆくべきテーマは多いが、その第一歩として訪中できた意義は大きい。

今回の研修によって学習したことを今後の調査・研究に十分活用していくことは、当然であるが、それよりも増して、いまの日中友好関係のために、微力ではあるが尽力できるように努力してゆくことも、我々に与えられた永遠の研修テーマでもある。

(1992年12月21日稿)

(こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

府内遺跡紹介

58. 史跡平川廃寺跡

史跡平川廃寺跡は、城陽市平川に所在し、1973年以来断続的に発掘調査が実施され、文献史料には見えない寺院跡であることが明らかになった。特に、平川廃寺跡の西にほぼ接して赤塚古墳が存在しており、造られた時期が異なるにもかかわらず、古墳と寺院をセットで考える説もあって、南山城地域でも重要な遺跡の一つとなっている。この赤塚古墳と平川廃寺との位置関係は注目される。赤塚古墳が先に造られ、約100年以上も経過した後に古墳をよけるようにして平川廃寺が建立されているのである。あるいは同一勢力の造営に係わるとする見方も存在している。

平川廃寺の存在する地域は、現在の城陽市の最も北部に位置し、旧郡名では久世郡に属する。この平川廃寺の近辺には久津川車塚古墳を盟主とする久津川古墳群など、多くの古墳群が築かれたところで、開発の面ではかなり早くから開けていた地域である。ただ、開発といっても、古墳が多いことから、ある意味で、「聖なる地域」と意識されていたかもしれない。

寺院の伽藍は、発掘調査でほぼ明らかになっている。現在までのところ、講堂跡は確認されていないが、塔を西に、金堂を東に配置して回廊で囲む、いわゆる法隆寺式伽藍配置が考えられている。化粧基壇は、いずれも瓦積み基壇であり、地方寺院としてはよくある形態である。

遺跡所在地(1/50,000)

塔基壇の規模は、一辺が17.2mを測るかなり大きなもので、3間×3間の総柱の七重塔が建っていたと推定されている。金堂基壇の規模は、東西22.5m×南北17.2mを測り、3間×2間の身舎に、4面廂がつく形態であることが判明した。

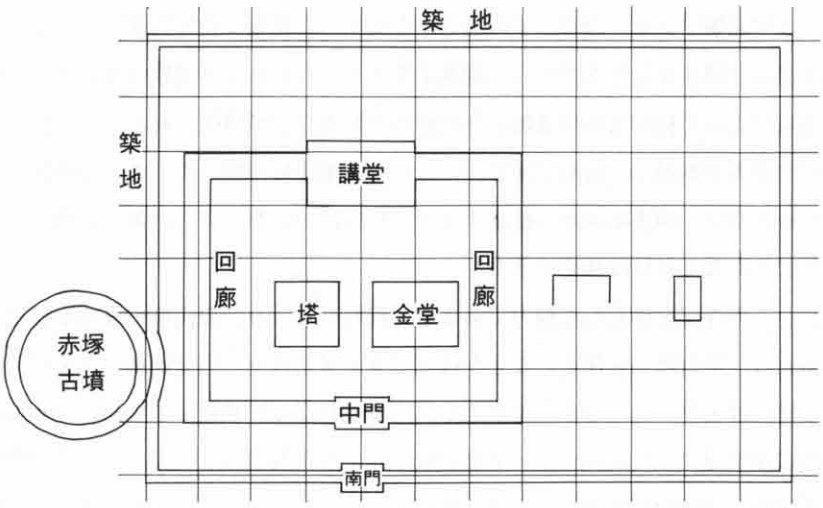
塔の基壇東辺と金堂の基壇西辺の距離は、わずか8.6mで、ほぼ塔基壇の約半分しかないことが調査当時から注目されていた。このように、塔と金堂があまりに近接して建てられ

ていることから、造営する上での尺度として、その間隔を一単位として8.6m＝30尺が想定された。この尺度で計算すると、塔は礎石の配置から12尺等間となり、金堂も平面の長さが桁行54尺(15.5m)×梁間36尺(10.3m)で復原されることになった。この造営尺度の発見から、塔と金堂の心々距離は約100尺となり、造営のときの方格の計画線は、一辺50尺であったことが判明した。

その後、調査の進展で、東辺を除く西南北を画する築地塀跡が検出されたため、寺域がほぼ確定するに至った。その結果、復原された寺域の東西は600尺(約172m)、南北は400尺(約115m)で、東西方向に長い長方形をとることが判明した。しかも、伽藍の中心線は、寺域の西側に片寄っており、伽藍そのものが赤塚古墳と極めて近い位置関係にあることが判明したのである。

このように伽藍の西側にはすぐに築地がくるため、建物の建つ余地がないが、東側では現在までに2棟の建物跡が検出されている。この建物跡の周辺にも瓦の散布するところがあるため、これらの建物以外にも数棟存在したことが推定されている。

次に、これらの伽藍がいつ頃建立されたかという問題であるが、文献史料がないため、詳しい経過はほとんどわからないのが現状である。現在のところ、出土した遺物からおおよその建立された年代などが考えられているにすぎない。出土遺物のうち、軒瓦の型式が古いものでは山田寺式、川原寺式がある。特に、川原寺式軒丸瓦は、南山城地域一帯に比較的広く分布する瓦当文様で、通常の川原寺式の亜種であることから高麗寺式と呼ばれている。作られたのは、7世紀後半の天武朝頃と言われている。中には、それよりも1型式古い天智朝頃のものも存在するようである。山田寺式の方は、大和山田寺の建設期間が長



第2図　平川廃寺50尺方格伽藍配置計画図(1/2,000)
(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集より再トレースした。)

く、7世紀中葉から後半にかけての皇極～天智朝頃にわたるため、瓦当もその頃と言われている。これらの瓦当文様から推定する限り、7世紀後半の天智～天武朝頃に平川廃寺の創建がなされたと考えられるのである。

このように、平川廃寺は、南山城地域では急速に寺院の数が増加する7世紀後半になってから建立されたことがほぼ確実になっている。むろん、建立されてから廃絶するまでの間、全く修理などの改修作業がなかったわけではない。塔の基壇では、瓦積みを積み直す程度の補修工事は行われたようである。しかし、金堂の方では塔のように単なる補修とは異なり、基壇の南辺が継ぎ足されるといった大工事の行われたことが発掘調査によって明らかになっている。発掘担当者は、この時の補修工事が柱を建て直すためのものではなく、建物に孫廂を設けて堂全体を大きくしたことからくると推定されている。実情はよくわからないが、その時期は奈良時代後期末頃と考えられており、そのころに一度大きな補修が行われたことがわかる。

このことは、瓦当文様からも推定でき、屋根瓦も奈良時代末から平安時代初期頃に大がかりな瓦の葺き換えが行われたようである。しかも、この時の瓦の葺き換えは、平川廃寺だけではなかったようである。久世郡内に所在する正道官衙遺跡、久世廃寺などの官衙や寺院などでも奈良時代末から平安時代初期頃に比定される同じ型式の軒瓦が出土している。どうも、この時の補修工事は久世郡一帯に及んでいたことがわかる。発掘担当者は、『続日本紀』延暦3(784)年12月乙酉条に、長岡京遷都に際して役夫を飼養したことで栗前連廣耳の名がみえることから、このことと関連するのではないかと考えている。しかし、この栗前連は文脈からすれば山背国葛野郡に本貫があると考えるべきで、長岡京の造営そのものを示す記事である。ただ、平川廃寺から出土した瓦などの年代観からみて、時期的に長岡京遷都と関連するときであり、関連事業として行われた可能性は存在する。今後の資料の増加によって長岡京への遷都と寺院補修の関連などが解明されることと思う。

この平川廃寺が廃絶した時期であるが、これも文献史料が残っていないため詳しい経過などはわからない。調査結果から推定すると、平安時代になって、次第に旧勢力の衰えと運命を共にしたことだけは推定できる。

最後に、この寺院を建立した勢力であるが、現在のところ、南山城の豪族が推定されている。例えば、栗前県に居住したことが確認できる栗前氏や、山背画師とともに天智～天武朝にしばしば名前の見える黄文連本実が出た黄文氏などが候補としてあげられる。しかし、現実に誰が建立したかよりも、7世紀後半の壬申の乱前後を境にして、この南山城地域には爆発的に寺院の数が増大することの方が重要であろう。この平川廃寺もその潮流上にある寺院と考えられ、さらに8世紀後半から末葉にかけて郡単位で官衙や寺院などの修

理事業が行われているとすれば、かなり政策的に建立された可能性もあろう。今後の研究の深化が期待されよう。

（土橋　誠）

<参考文献>

中谷雅治「平川廃寺址(京都府久世郡)の調査」（『古代文化』17-1　(財)古代學協會）　1966

山田良三「栗隅県寺院址の歴史的背景」（『花園大学研究紀要』創刊号　花園大学）　1970

平良泰久・近藤義行・奥村清一郎ほか「平川廃寺発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集　城陽市教育委員会）　1973

平良泰久・近藤義行ほか「平川廃寺発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集　城陽市教育委員会）　1974

近藤義行「平川廃寺第5次発掘調査概要」（『京都考古』10　京都考古刊行会）　1975

近藤義行他「平川廃寺発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集　城陽市教育委員会）1975

平良泰久「平川廃寺の計画性について」（『京都考古』13　京都考古刊行会）　1975

山田良三「栗隅県寺院跡の歴史的背景」（『歴史読本』21-12　新人物往来社）　1976

近藤義行・梶本敏三「久世廃寺他発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第8集　城陽市教育委員会）　1979

藤井利章「古代南山城の仏教受容形態」（『続国家と仏教』古代・中世編　永田文昌堂）　1981

近藤義行・梶本敏三「平川廃寺第7次発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集　城陽市教育委員会）　1981

近藤義行「平川廃寺・赤塚古墳発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集　城陽市教育委員会）　1983

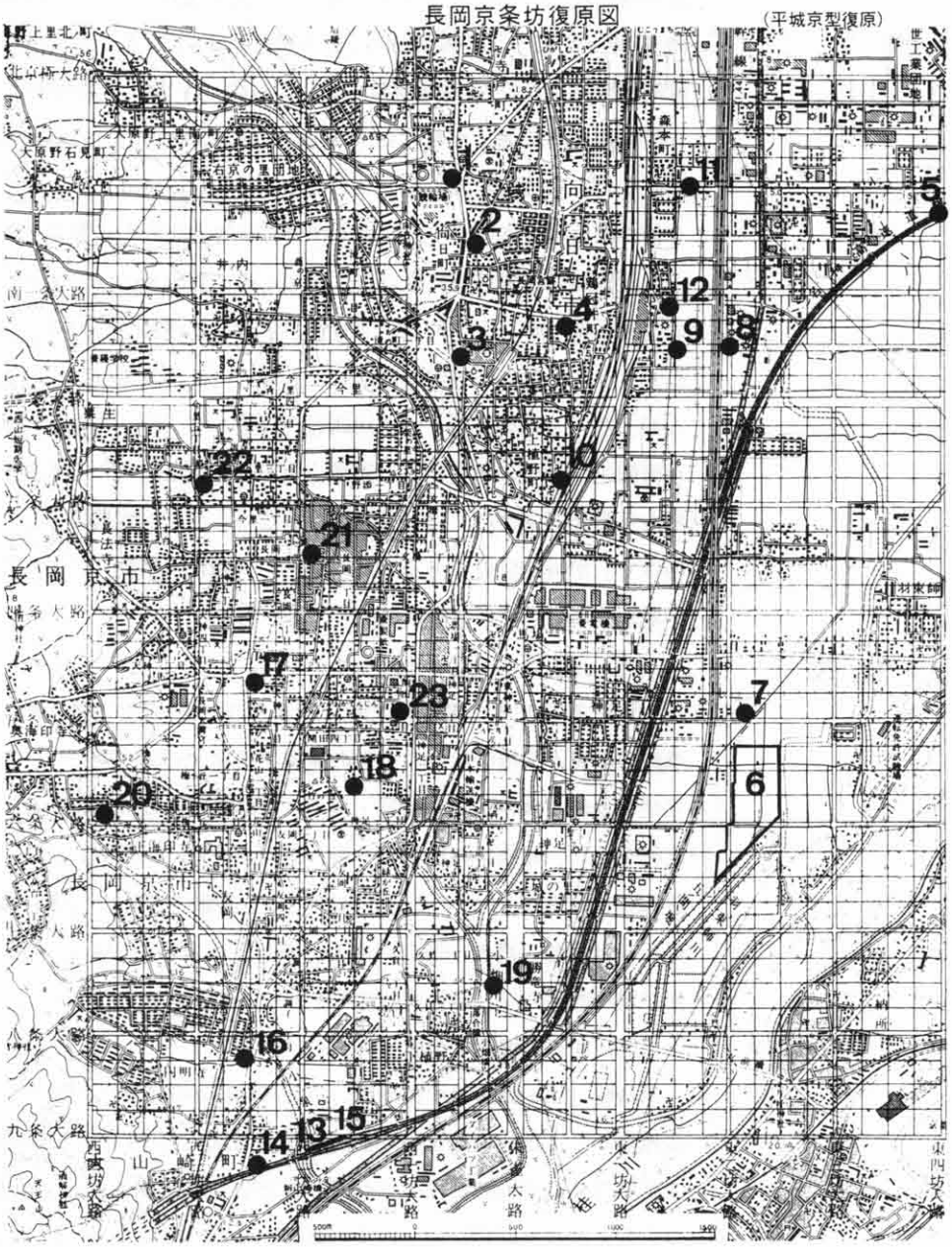
長岡京跡調査だより・44

平成４年11月25日・12月16日・平成５年１月27日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内４件、左京域８件、右京域11件、京外その他２件の計25件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1993年１月末現在)

番号	次　数	地区名	調　査　地	調査機関	調査期間
1	宮内272次	7AN17E	向日市寺戸町西野辺1	(財) 向日市埋文	10/26～12/25
2	宮内273次	7AN13M	向日市寺戸町東ノ段3	(財) 向日市埋文	11/16～12/10
3	宮内274次	7AN15V	向日市上植野町馬立2	(財) 向日市埋文	11/20～12/19
4	宮内275次	7AN9Y	向日市鶏冠井町山畑	(財) 向日市埋文	1/22～
5	左京286次	7ANWSA-2	京都市伏見区久我本町	(財) 京都府埋文	1/18～
6	左京288次	7ANMND-2	京都市伏見区淀樋爪町	(財) 京都市埋文	4/1～
7	左京295次	7ANMTG-5	長岡京市神足棚次6-1	(財) 長岡京市埋文	10/12～1/20
8	左京296次	7ANEKD-6	向日市鶏冠井小深田25	(財) 向日市埋文	10/5～11/26
9	左京298次	7ANESH-9	向日市鶏冠井町沢ノ東	(財) 向日市埋文	10/27～12/19
10	左京299次	7ANFMZ-4	向日市上植野町南小路	(財) 向日市埋文	12/21～1/19
11	立会調査	7ANDHC	向日市森本町東ノ口	京都府教委	11/12～11/17
12	立会92124次	7ANEIS他	向日市鶏冠井町石橋	(財) 向日市埋文	1/11～1/20
13	右京368次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壱町田	(財) 京都府埋文	4/8～
14	右京394次	7ANSIR	大山崎町円明寺井尻	(財) 京都府埋文	1/8～
15	右京395次	7ANSID-4	大山崎町円明寺壱町田	(財) 京都府埋文	4/8～
16	右京402次	7ANSSZ	大山崎町円明寺	大山崎町教委	5/6～
17	右京411次	7ANKNZ-2	長岡京市天神一丁目	(財) 京都府埋文	8/24～11/20
18	右京413次	7ANMSI-12	長岡京市開田四丁目	長岡京市教委	11/17～12/28
19	右京414次	7ANQNT-2	長岡京市勝龍寺二ノ坪	(財) 長岡京市埋文	11/24～12/7
20	右京415次	7ANOHR-7	長岡京市下海印寺方丸	(財) 長岡京市埋文	12/1～12/25
21	右京416次	7ANKYR-4	長岡京市長岡三丁目	(財) 長岡京市埋文	12/10～1/18
22	右京417次	7ANINC-5	長岡京市今里西ノ口	(財) 長岡京市埋文	1/11～
23	右京418次	7ANKST-5	長岡京市開田二丁目	(財) 長岡京市埋文	1/18～
24	山城国府跡第17次		大山崎町円明寺夏目	大山崎町教委	9/24～11/13
25	物集女車塚第5次		向日市物集女町南条	(財) 向日市埋文	12/2～



▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

左京第288次（6）

（財）京都市埋蔵文化財研究所

長岡京の東南部に当たり、広範囲に渡る調査が継続実施中。今回の調査では、左京六条三坊二町域(水垂Ｅ１区)から掘立柱建物跡16棟のほか、柵列２条・井戸跡・条坊関係遺構(東二坊大路東側溝・東三坊第一小路西側溝・六条々間大路北側溝)及び町内区画溝等が検出された(条坊呼称は、従来のもの)。宅地内の建物群は、一町の南西隅に偏った東西45m(15丈)、南北30m(10丈)の範囲に配置され、二時期の建て替えが認められている。両期とも、片庇を持つ東西棟の主屋を中心に南北棟の付属雑舎が周囲に配置される。改築期の主屋(建物15)は、３間×４間(梁間7.8m×桁行9.8m)の規模を持つが、全体的に小ぶりで、宅地占有面積と合わせ下級役人クラスの住人が想定される。出土遺物には、日常什器・墨書人面土器・土馬等がある。今回調査の成果としては、先年行われた南側の三町域の調査結果と同様、地形上低湿地に当たる本調査地から南東部にかけては、条坊施行が認められず、実質的な「京のはて」が当地付近であること、また、「四行八門制」によらない宅地割りの存在が確認されたこと等である。

左京第295次（7）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

左京五条三坊四町(新呼称では、六条三坊二町)及び雲宮・棚次遺跡の調査。古墳時代から中世の遺構を検出。長岡京期では、掘立柱建物跡２棟のほか、柵列・井戸・溝群等がある。溝は概ね南北軸をとり、建物跡の南側に一条の東西溝を挟んで櫛状に走る。耕作に関するものか。出土遺物には、土器類のほか、分銅・漆器・緑釉陶器・墨書土器等がある。分銅は、重さ134.68ｇで、上面に環状の釣り手と花弁状の飾りをもつ「かぼちゃ型」を呈する。

左京立会第92124次（12）

（財）向日市埋蔵文化財センター

「東院」比定調査地の南西側、東二坊坊間小路を挟んで対峙する地点から、推定小路を股ぐ形で東西５間以上(７間？)の大形掘立柱建物跡の掘形列が検出された。部分的な調査ながら、二町域の中央を占める建物位置や、出土遺物に鬼瓦・塼等がみられること等注意される。

（辻本和美）

センターの動向（4．11～5．1）

1．できごと

11.4　新田遺跡(田辺町)発掘調査開始

6　片山一道京都大学理学部助教授、里ケ谷横穴(大宮町)現地指導

10　平安京跡(京都市・住宅)関係者説明会

長岡京跡右京第411次(長岡京市)関係者説明会、発掘調査終了(9/24～)

11　大極殿祭(向日市)出席(城戸局長、佐伯次長)

12　左坂古墳群(大宮町)発掘調査終了(9/24～)

12～13　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)出席(城戸局長、上田、松尾主事)

13　里ケ谷横穴群(大宮町)現地説明会

鹿谷遺跡(亀岡市)関係者説明会、発掘調査終了(6/12～)

平安京跡(京都市・住宅)発掘調査終了(9/24～)

16　職員研修、講師：中沢圭二理事「プレートテクニクス理論と京都府の地質」

18　視覚障害者社会教育指導者研修会(和知町)講演(安藤課長)

19　足利健亮理事、荒坂遺跡、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察

20　婦人教育会館会館10周年記念式典(長岡京市)出席(佐伯次長)

内里八丁遺跡現地説明会

21　第10回講演会　別掲

22　日本考古学協会総会(於：奈良市)出席(筒井崇史調査員)

24　足利健亮理事、平安京跡(京都市・府警察本部)現地視察

25　加悦町古墳公園竣工式、中谷次長、佐伯次長出席

長岡京連絡協議会

26　コンピューター等導入検討委員会(於：京都市)出席(辻本係長、土橋主任調査員)

12.1　第35回役員会・理事会開催(於：堀川会館)、福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、藤井　学、佐原　真、足利健亮、堤圭三郎の各理事出席

2　上田正昭理事、八木城跡(八木町)現地視察

4　下岡古墳(加悦町)現地説明会

8　平安京跡(京都市・西別館)発掘調査開始

11　下岡古墳発掘調査終了(9/22～)

15　奈良国立文化財研究所研修(金属遺物科学調査課程)出席(野島調査員)

16　長岡京連絡協議会

17　長岡京右京第395次・下植野南遺跡(大山崎町)関係者説明会

18　中谷古墳群(弥栄町)発掘調査終了(4/21～)

芋谷遺跡(大宮町)発掘調査終了(11/11～)

内里八丁遺跡発掘調査終了(4/23～)

22　奈良国立文化財研究所、上野邦一遺構調査室長、長岡京跡現地指導

1.8　里ケ谷横穴群発掘調査終了(8/25～)

12　神宮谷古墳(綾部市)現地説明会

18　嗎岡南古墳(加悦町)発掘調査開始

21～22　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック役員会(於：和歌山市)出席(城戸局長、中谷次長、杉江主事)

22　瓦谷遺跡(木津町)現地説明会

27　長岡京連絡協議会

2．普及啓発活動

11.21　第10回講演会「経塚とその問題」(於：長岡京市立中央公民館)報告：小池　寛「中世墓に伴う経塚について－福知山市高田山中世墓・経塚群を中心として」、講演：難波田　徹「埋経の諸問題」

(安藤信策)

受贈図書一覧（4．11．1～5．1．31）

苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより No.29
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第160・163・164・171・177集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.58
秋田県立博物館	博物館ニュース No.90
多賀城市埋蔵文化財センター	多賀城市文化財調査報告書 第21・23集
(財)栃木県文化振興事業団	(財)栃木県文化振興事業団年報 －平成3年度版－
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第125・140集
(財)千葉県文化財センター	房総考古学ライブラリー 6
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第95・106～121集
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター年報 11、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 25・26
(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター	仏向遺跡
(財)山梨文化財研究所	第3回「考古学と中世史研究」シンポジウム「村の墓・都市の墓」－中世考古学及び隣接諸学から－資料集、帝京大学山梨文化財研究所報 第15・16号
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第71集
(財)岐阜県文化財保護センター	きずな 第5号
(財)愛知県埋蔵文化財センター	年報 平成3年度、(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第19・26・29・31・32・35・38～41集、埋蔵文化財愛知 No.30
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	埋文にいがた 創刊号
富山県埋蔵文化財センター	平成4年度特別企画展図録「斧の文化」、埋文とやま 第40号
(社)石川県埋蔵文化財保存協会	(社)石川県埋蔵文化財保存協会年報 2・3
(財)滋賀県文化財保護協会	鴨田遺跡発掘調査報告書 Ⅱ、文化財調査出土遺物仮収納保管業務平成3年度発掘調査概要、県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報

	告書 Ⅷ－１・２、梅ノ木遺跡発掘調査報告書、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 ⅩⅨ－１～５・７・８一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書 Ⅲ・Ⅳ、野路小野山遺跡発掘調査報告書、粟津湖底遺跡、錦織遺跡、唐橋遺跡、千僧廃寺遺跡発掘調査報告書、松原内湖遺跡発掘調査報告書 Ⅱ、滋賀文化財だより No.173～181
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第151～153号
(財)大阪文化財センター	図録農耕の技術とまつり 池島・福万寺の調査から、みるきくふれる原始・古代のコメ作り－農耕の技術とまつり－
(財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第24・25・39～41・45～50・52～56・59～62・64～69輯、(財)大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告第３冊、(財)大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 １、シンポジウム日根荘総合調査が語るもの－中世荘園世界の解明をめざして－、日根荘とその周辺－空港関連事業の調査から－、第６・７回 泉州の遺跡
(財)大阪市文化財協会	葦火 41号
(財)枚方市文化財研究調査会	(財)枚方市文化財研究調査会研究紀要 第２集、ひらかた文化財だより 第13号
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 31・34
(財)元興寺文化財研究所	元興寺文化財研究 No.43
奈良国立文化財研究所	遺跡探査 No. 3
桜井市立埋文センター	桜井市内埋蔵文化財1991年度発掘調査報告 3
(財)和歌山県文化財センター	稲成遺跡発掘調査概報、稲成遺跡－一般国道42号(田辺バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－、粟生遺跡、有田郡清水町栗生遺跡 県道有田・高野線道路改良工事に伴う第４次発掘調査概報、栗生遺跡発掘調査報告書－県道有田・高野線道路改良工事に伴う発掘調査－、金剛峯寺遺跡－南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査－、金剛峯寺遺跡－高野山霊宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査報告書－、金剛峯寺遺跡発掘調査概要－紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査－、根来寺坊院跡－岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う発掘調査－、根来寺坊院跡　町道根来・北大池線改良舗装工事に伴う発掘調査概報、根来寺坊院跡－根来寺公衆便所設置に伴う発掘調査概報－、根来寺坊院跡－前山地区宅地造成工事に伴う調査－、吉原遺跡、吉原遺跡－県道柏・御坊線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－、今福町遺跡発掘調査概報、岡村遺跡－亀の川中小河川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報－、速玉大社境内遺跡発掘調査概報、田殿尾中遺跡発掘調査概報、西国分Ⅱ遺跡

	発掘調査概報、佐野遺跡発掘調査概報、小熊Ⅲ・木曽遺跡試掘調査報告書、鳥居遺跡発掘調査概報、笠嶋遺跡、山東22号古墳、南紀男山焼、(財)和歌山県文化財センター年報 1987～1991
(財)広島県埋蔵文化財センター	ひろしまの遺跡 第51号
(財)広島市歴史科学教育事業団	(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第２～７集
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.218・219
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第１冊、いにしえの讃岐 第５号
(財)徳島県埋蔵文化財センター	真朱 創刊号
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書 第135・142集
前橋市教育委員会	前橋市前山Ⅱ遺跡、荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡、国分境Ⅱ遺跡、今城遺跡、前田Ⅱ遺跡、大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報 Ⅰ、横俵遺跡群 Ⅴ、元総社明神遺跡 Ⅹ、芳賀北原遺跡、市内遺跡発掘調査報告書
志木教育委員会	志木市の文化財 第17・18集
川崎市教育委員会	川崎市文化財図鑑、川崎市文化財調査収録 第27集、麻生環境センター内第２次古環境調査報告書
塩尻市教育委員会	丘中学校遺跡、上竹・云光
愛知県教育委員会	愛知県埋蔵文化財情報 7
小杉町教育委員会	小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧 1991年度、小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要、小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要、小杉町黒河尺目遺跡発掘調査概要、小杉町白石遺跡発掘調査概要
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告 20
多賀町教育委員会	多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書 第４～６集、特別展「青龍山 敏満寺と東大寺」
野洲町教育委員会	野洲町文化財資料集 1991－３・1992－１～３
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市民俗文化財調査報告 １、絵図に描かれた狭山池
柏原市教育委員会	高井田山横穴群 Ⅳ
泉南市教育委員会	古代の豪族
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群 ⅩⅢ、第７回 はびきの歴史シンポジウム
奈良市教育委員会	第10回 平城京展

橿原市教育委員会	秋季特別展「古代の琴」
御坊市教育委員会	昭和63年度～平成３年度 御坊市内遺跡発掘調査概報
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財調査報告 17
西紀、丹南町教育委員会	西紀、丹南文化財調査報告 第８～10集
太子町教育委員会	播磨国鵤荘現況調査報告 Ⅳ
八鹿町教育委員会	八鹿町の石造遺物、兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ 第５集
倉敷市教育委員会	倉敷市埋蔵文化財調査年報 1
倉吉市教育委員会	倉吉市内遺跡分布調査報告書 Ⅵ、柴栗古墳群発掘調査報告書、横谷峰遺跡発掘調査報告書、伯耆国庁跡の発掘調査(第７次調査の概要)
広島県教育委員会	広島県埋蔵文化財保護行政資料 ３、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第105集、いぶき No.２・３
高松町教育委員会	高松町大海西山遺跡
大野城市教育委員会	大野城市文化財調査報告書 第34～36集、大野城市の文化財 第24集
大分県教育委員会	大分県文化財調査報告書 第83・89輯、慈眼山瀬戸口遺跡、大分県内遺跡詳細分布調査概報 11、中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
大野町教育委員会	駒方津室迫遺跡・夏足原遺跡
都城市教育委員会	都城市文化財調査報告書 第14～20集
鹿児島市教育委員会	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (13)～(15)
知覧町教育委員会	知覧町民俗資料調査報告書（２）
青森県立郷土館	青森県立郷土館調査報告 第31集
大船渡市立博物館	写真にみる気仙－明治・大正・昭和初期－
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第18号
浦和市立郷土博物館	浦和市立郷土博物館館報 第42号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第43・44集、石見国邇摩郡福光下村、歴博 第56号
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報 15、千葉県立房総風土記の丘だより 第24号
芝山古墳・はにわ博物館	かんぽう武射 No.４・５
下総史料館	かみしき 33
流山市立博物館	流山市立博物館 No.14
成田山霊光館	なりた No.55
板橋区立郷土資料館	江戸の旅と流行仏－お竹大日と出羽三山、板橋の歴史
大田区立郷土博物館	室生犀星文学アルバム

調布市郷土博物館	くらしっく自転車図鑑、調布市郷土博物館だより No.41
(財)五島美術館	五島美術館展覧会図録 No.113
府中市郷土の森	あるむぜお 第22号
茅ケ崎市文化資料館	資料館だより No.81
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館・山梨県立埋蔵文化財センター要覧、第9回特別展 縄文土器その心象世界、開館10周年記念特別展 天下人の時代
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 106号
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要 11、日本六古窯サミット記念特別展 瀬戸焼1300年の歩み
名古屋市博物館	名古屋市博物館調査研究報告 Ⅱ
蒲郡市博物館	特別展 吉野ヶ里遺跡
斎宮歴史博物館	特別展 王朝文化の美－源氏物語の世界－、斎宮をめぐる人々－斎王の恋人たち－
富山市考古資料館	富山市考古資料館報 第22号
福井県立博物館	ふくいミュージアム No.22
滋賀県立安土城考古博物館	常設展示解説
大津市歴史博物館	博物館だより 第12号
彦根城博物館	彦根城博物館だより 19
柏原市立歴史資料館	高井田横穴群
岸和田市立郷土博物館	東洋の官窯陶磁展図録
吹田市立博物館	吹田市立博物館、吹田市立博物館常設展示図録、開館記念特別展 北摂の仏教美術－聖と民衆の祈り－
八尾市立歴史民俗資料館	八尾市立歴史民俗資料館研究紀要 第3号
香芝市二上山博物館	第2回特別展　弥生人の『鳥獣戯画』
神戸市立博物館	博物館だより No.41・42
明石市立文化博物館	'92秋季特別展 明石城の歴史と文化、明石市立文化博物館ニュース No. 2
芦屋市立美術博物館	特別展 弥生争乱－山のムラの謎－、なりひら 第7・8号
播磨町郷土資料館	弥生物語－土器が語る大中遺跡－
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No.116
広島県立歴史博物館	広島県の重要文化財 2、広島県立歴史博物館ニュース 第13号
福岡市博物館	福岡市博物館常設展示案内、平成元年度収集収蔵品目録 7、福岡市博物館研究紀要 第2号、福岡市博物館だより No. 6・8
前原市立伊都歴史資料館	伊都－古代の糸島－
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館	年報 第22号、佐賀県立博物館・美術館報 第97・98号

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	弥勒憧憬－道長の夢 五十六億七千万年後の救い－
東京大学総合研究資料館	異民族へのまなざし［古写真に刻まれたモンゴロイド］、東京大学総合研究資料館ニュース 26号
早稲田大学図書館	古代 第94号
東海大学校地内遺跡調査団	東海大学校地内遺跡調査団報告 3
天理大学附属天理参考館	天理参考館報 第5号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報 9、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号
別府大学付属博物館	別府大学付属博物館だより No.38
博古研究会	博古研究 第4号
新宿区市谷仲之町遺跡調査団	市谷仲之町遺跡 Ⅱ
八王子越野遺跡発掘調査団	越野遺跡発掘調査報告書
ジャパン通信社	文化財発掘情報 119号
中央公論社	黄金太閤
名著出版	歴史手帖 第230～232号
雄山閣出版	季刊考古学 第42号
長久手町	長久手町史 資料編 六
(財)古代學協會	古代文化 第406～408号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第43号
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵の発掘－考古学調査10年の成果－
狭山池調査事務所	狭山池調査事務所平成3年度調査報告書
羽曳野市遺跡調査会	古市大溝(軽里4号墳)発掘調査概報
中世土器研究会	中世土器研究 第61～68号
朝鮮学会	朝鮮学報 第144・145輯
木簡学会	木簡研究 第14号
六甲山麓遺跡調査会	神戸市東灘区岡本北遺跡、神戸市灘区岩屋北町遺跡、豊中市岡町北遺跡－第3次調査－
御坊市遺跡調査会	御坊駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ・Ⅲ、小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅶ、広域営農団地農道整備事業に伴う岩内古墳群他埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅱ
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 41号
京都市文化観光局	京都市の文化財－京都市指定・登録文化財集－［建造物・文化財環境保全地区］・［美術工芸品］・［記念物］・［民俗文化財］

(財)京都市埋蔵文化財研究所	京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第11冊
京都府教育委員会	京都府指定・登録文化財等目録、文化財保護 No.10
亀岡市教育委員会	第8回特別展示図録「民俗芸能～人形浄瑠璃～」
宇治市教育委員会	平等院 庭園発掘調査概要報告
八幡市教育委員会	企画展 やわたの昔、見て、ふれて
福知山市	福知山市文化財情報 創刊・第2号
八幡市	市制15周年記念 八幡
加茂町	紫陽花 第15号
京都府立総合資料館	総合資料館だより No.94
京都市歴史資料館	京都市歴史資料館紀要 第10号、京都市史編さん通信 No.238・239
宮津市立前尾記念文庫	図書目録
京都大学考古学研究会	岩倉古窯跡群
京都橘女子大学	洛東探訪、研究紀要 第19号
同志社大学	'92同志社大学公開講座
仏教大学総合研究所	仏教大学総合研究所報 第3号
京都芸術短期大学文化財科学研究所	芸術文化研究所研究紀要 1
(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No.79
穴沢咏光	双葉町歴史民俗資料館研究紀要 第1号
寒川　旭	地理 Vol.38　No.1
辰巳和弘	引佐町の古墳文化 V
堀田啓一	八尾市文化財紀要 6
森広　隆	山口県吉敷郡阿知須町引野遺跡 第3次発掘調査報告、山口県埋蔵文化財調査報告 第9集
八重樫純樹	埼玉考古 別冊4－3

編集後記

年度末になり、いよいよ新年度が近づきましたが、情報47号が完成しましたのでお届けします。

本号では、難波田先生に玉稿をご投稿いただき、充実した号になりました。また、中海道遺跡の報告も連載三回目を迎えて、一層の充実が見られるようになりました。今後は、情報でも資料紹介や研究ノートももっと掲載していきたいと存じますので、よろしくご期待ください。

なお、本情報誌は、42号からMacintosh上でQuarkExpressを用いて編集しています。今後も続けていきたいと存じますので、ご意見等がございましたらどしどしお寄せください。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第47号

平成５年３月１９日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel(075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel(075)441-3155（代）